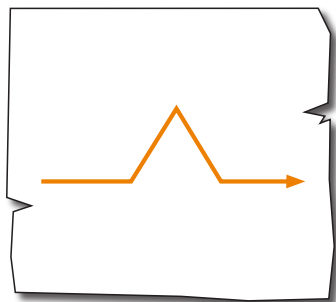


7 THE 7 FRAMES FOR All LIFE 7つのワクワク枠 みんなのコンパス③

第7フレーム



木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

何十倍、何百倍も
うれしいのです。

恋人^る溜^ね音、おじいさん…と愛し合う
青年期さんぽのフルーツフル果実物語

SAMPO FRUITS



みんなのコンパス③



プロローグ

232

るね こうふんき せき み はな と
溜音は興奮気味に話した。「すごいじゃない！ ついにナゾが解け
たじゃない！

きっと、これらこそが探し求めた“究極の意味”よね？

しゃかいげんしょう どうしんだい じんせいげんしょう ずのう しこうげん
マクロの社会現象も、等身大の人生現象も、頭脳における思考現
しょう しんしん かんじょうげんしょう しんたい せいり げんしょう せいめい
象も、心身における感情現象も、身体の生理現象も、ミクロの生命
げんしょう ふく げんしょう ぶつりがく かがく あつか ぶつしつげんしょう
現象も含むライフ現象も、物理学や化学が扱う物質現象も——

しゃかい かがく じんぶん かがく しぜん かがく
社会科学も人文科学も自然科学も——

つまりは、文も理も、共通の土台の上で説明できるんですもの。

すごいことよ。きっと大発見よ！ 早く世の中に発表しましょう
よ！」

「——。——ほんとうに、これらだけでいいのだろうか？」と僕。

「え？ ——どうして？」

「だって—— まだ何かが足りないような気がするんだ」

「——え？」

「まだ、ライフのパズルを解く究極のカギではない気がするから」

「——そうね」

「それに、知識^{ちしき}アップだけでなく、知恵^{ちえ}アップやフルーツ^{そだ}育てにも貢献^{こうけん}したいんだ。“世^よの中^{なか}のみんなのためになって、みんなが満足^{まんぞく}できるフルーツ”のような、おいしさにつなげたいんだ。

——山^{やま}は越^こえたから、あとは、もうちょいさ」

「うん♪」

233

その日^ひの晩^{ばん}、自分^{じぶん}のアパートのベッドの上^{うへ}で仰^{あおむ}向けになりながら、あれこれ^{おも}思いめぐらせた。

これまでの、第^{だい}7フレーム^{くわ}に加え——、

第^{だい}1フレーム『カタチ コトバ カラダ アタマ』のすべて、

第^{だい}2フレーム『カコ イマ ミライ』の中^{なか}の『カコ』、

第^{だい}3フレーム『→』、

第^{だい}4フレーム『In Out』、

第^{だい}6フレーム『Off On』を^{りよう}利用^{こうさつ}した考察^{こうさつ}が、メインだった。

知恵^{ちえ}アップやフルーツ^{そだ}育てにつながることを^{かんが}考えるためには、きつと、第^{だい}5フレーム『Against For』の中^{なか}の『For』、および、第^{だい}2フレーム『カコ イマ ミライ』の中^{なか}の『イマ』や『ミライ』が、より^{だいじ}大事^{だいじ}になるだろう。

『イマ』——

し ぜん は かい もんたい
自然破壊の問題

4 みんなのコンパス③

かんきょうおせん もんだい
環境汚染の問題

きょくたん きこうへんどう もんだい
極端な気候変動の問題

しゅ ぜつめつ もんだい
種の絶滅の問題

とうそう もんだい
さまざまな闘争の問題

...

いろいろな問題が、人間社会レベルのライフ、人間レベルの
ライフを含む全人類の前に山積みになっている。

それでは、『ミライ』はどうなるのだろうか？

はたして、人間社会レベルのライフ、人間レベルのライフを含む
全人類は、このまま長く存続できるのだろうか？

それとも――

...

いま、みんなのために何ができるのだろうか？

...

そして――

ふと、溜音との会話で登場した“かわいたちくん”ことを思い出
したんだ。

ニホン・カワウソ――

ぜつめつ い かれ かのじょ
絶滅したと言われている彼ら彼女ら――

...

さらに、ランプベリーのことも思い出した。

ランプベリーとともに過ごした幸せな日々――。

ランプベリーのおかげで楽しさが増した思い出たち――。

ランプベリー

・・・

さらに、コンパース一家のことも思い出した。

あの出会いは、いったい、何だったのだろう？

あの出会いは、何を意味していたのだろう？

彼ら彼女らは、いったい何者たちだったのだろう？

・・・

——あっ！

そのとき、ハッとしたんだ。

——そうだ！ 結局は、人間社会レベルのライフまでしか見てい
なかつたんじゃないか？

——もし、地球上のあらゆる生き物たちを含む、すべてのライフ
を“進化の最前線”と見なしたら、どうなるだろう？

ほかの生き物たち、ほかの種も視野に入れることで初めて見える
何か。人間社会レベルよりも、さらにズーム・アウトすることで
初めて見える何か。…

それらも、きっと、あるはずだ！

この方向づけは、考えが加速的に深まるきっかけとなった。

それなりの成果へと熟すまで、時間は、さほどかからなかった。

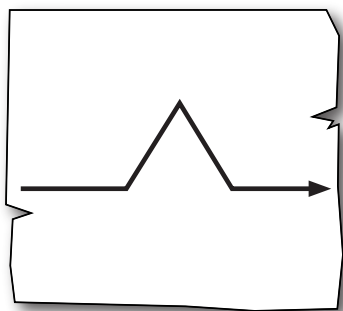
音楽——テーマ曲イン

♪ハーモニー Harmony

タイトル流れて

——音楽フェード・アウト

第7フレーム



234

音楽イン ♪春 Spring

桜が満開となったのは、それから1週間ほど経ってからだった。

その満開のタイミングに、ちょうど、ふたりの都合が合ったので、
溜音と僕は、お花見デートをすることにした。陽光に透ける桜の花
びらたちは、溜音の魅力を増幅しているようにも思われた。

お花見デートのゴール地点は、春の海辺だった。

浜辺に座っているふたり——。

ちょうど、そこはコンパース一家と別れた場所でもあった。

ザブーン、ザザザシュー …

「そう言えば、あの成果、楽しみよね。あれから、私、どうなるか、
ずっと楽しみにしていたわ」と溜音。

「ありがとう。——あれから、思いのほか考えがぐんぐん進んで、
割と早くからも大事な成果が得られていたよ」と僕。

「それは、何？」

「人間社会レベルの3ステップスからズーム・アウトすると見える、
さらに高次レベルの3ステップスさ」

「え？ ——知りたい。知りたい♪」

「うん。順を追って説明するよ。」

まず、「人類という種を構成する人間」どうしが関わり合うことで
人間社会レベルの3ステップスが成立するように、「動物や植物、
細菌などの種を構成する個体」どうしが関わり合うことで個体社会
レベルの3ステップスが成立する——」

「^{こ たい しゃ かい}個体社会レベル——」

「そうさ。この^{こ たい しゃ かい}個体社会レベルの3ステップスは、アリやハチなどの^{しゃ かい せい こん ちゅう}社会性昆虫とか、チンパンジーやゴリラなどの^{しゃ かい せい たい かい}社会性の高い^{れい ちやう}霊長類とかを構成する^{こ たい}個体^{あいだ}どうしの間^{せい り つ}だけで成立するとは限らないよ。

「^{すく}少なくとも、^{ゆう せい せい しょく}有性生殖するならば、すなわち、“オスとメス”の^{か か}関わり^あ合いで^{ほん しょく}繁殖するならば、^{すく}少なくともこの時点で^{じてん}個体^{こ たい}どうし^かが^{か か}関わり^あ合っているわけだから、これだけで^{こ たい しゃ かい}個体社会レベルの3ステップスが^{せい り つ}成立していることになる。まあ、これは、わりとイメージしやす^{おも}いと思うけど——」

「——」^{さくら}桜^{はな}の花びらのように、^{いろ}かすかに^{かの じょ}色づく^{ほお}彼女の^{べつ}頬——。

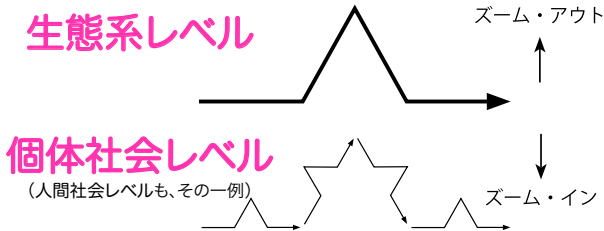
「^{べつ}って、別にイメージしなくてもよくて——」^ああわてて^ふフォローし、^{はなし}話を^{つづ}続けた。「たとえ、^{む せい せい しょく}無性生殖^{せい ぶつ}の生物^{こ たい しゃ かい}であっても、^{こ たい しゃ かい}個体社会レベルの3ステップスが^{せい り つ}成立しているよ。なぜって、^{む せい せい しょく}無性生殖^{せい ぶつ}の^ば場合^あも、ある^{こ たい}個体^{せい しょく}が^{つづ}生殖し^{えい じやう ぶん}続けられるか^{に つ こ う}どうか^かが、^か栄養分^{しゆ い}や^{そん ざい}日光^{どう し ゅ}などの^{こ たい}エネルギー^かが^{せい しょく}限られているが^{しゆ い}ゆえに、^{そん ざい}周囲^{どう し ゅ}に^{こ たい}存在^{せい しょく}する^{えい きやう}同種^{せい しょく}の^{せい しょく}個体^{せい しょく}の^{せい しょく}存在^{せい しょく}に影響^{せい しょく}されることになるのだから」

「——つまり、^{すく}少なくとも^{せい しょく}生殖^{ゆう せい}していれば、^{む せい}有性か^{かん けい}無性^{む せい}かに^{かん けい}関係^{かん けい}なく、^{しゆ}あらゆる^{こ たい しゃ かい}種^{せい り つ}において^{せい り つ}個体社会レベル^{せい り つ}の3ステップスが^{せい り つ}成立しているのね？」

「^{と お}その通り。^{すく}“少なくとも”だから、^{いく じ}育児^{けい ぎ}や^{けい ぎ}経済活動^{けい ぎ}を含む^{せい しょく}生殖^{せい しょく}以外の^{い と な}営み^{こ たい しゃ かい}においても、^{せい り つ}個体社会レベル^{せい り つ}の3ステップスが^{せい り つ}成立している^{こ たい しゃ かい}ことがありうる。もちろん、この^{こ たい しゃ かい}個体社会レベル^{せい り つ}の3ステップス^{せい り つ}の1例^{れい}として、^{にん げん しゃ かい}人間社会レベル^{せい しょく}の3ステップス^{せい しょく}も含まれているよ」

「——ええ、そうね」

「それで、いよいよ、この“^{にんげんしゃかい}人間社会レベルを含む^{こたいしゃかい}個体社会レベルの3ステップス”からズーム・アウトすれば、さらに^{こうじ}高次レベルの3ステップス、^{せいいたいけい}生態系レベルの3ステップスが^み見えてくるんだ」



「^{せいいたいけい}生態系レベル——」

「そう。

——^{たと}例えば、^{しゅ}種 A

と^{しゅ}種 B が^{ささ}支え合^あって

^{せいりつ}成立している^{せいいたいけい}生態系

レベルの3ステップ

スは、^{つぎ}次の^{しめ}ように示

すことができるよ」

「この^{せいいたいけい}生態系レベルの3ステップスも、^{にんげんしゃかい}人間社会レベルの3ステップスと、よく似ているね」

「そうさ。フラクタル的^{でき}に相似だからね。

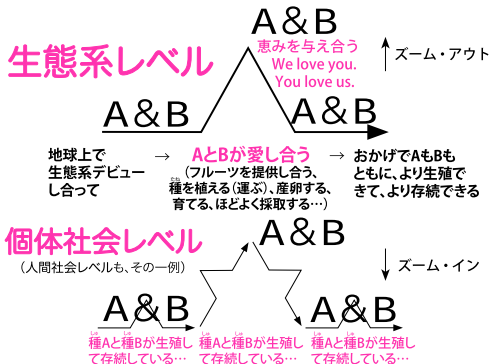
だから、^{せいいたいけい}生態系レベルのライフの成立——^{せいりつ}誕生や^{たんじょう}存続を決める^きカ

ギの1つは、やっぱり、『Love - Love の^{かんけい}関係』の^{こうちく}構築なんだよ。

^{にんげんしゃかい}人間社会レベルのライフのときと同様に——」

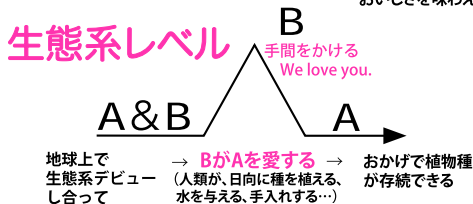
「『Love - Love の^{かんけい}関係』♪」

音楽 ♪春 Spring 235 に続く

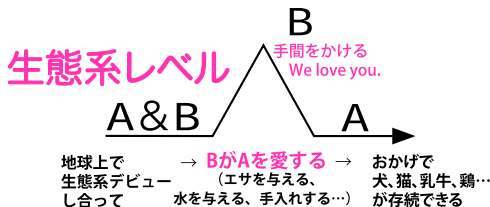
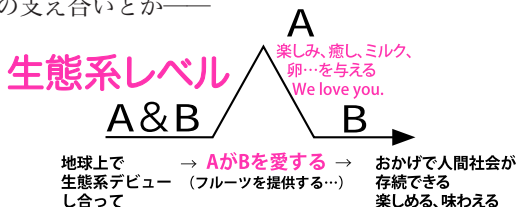


235

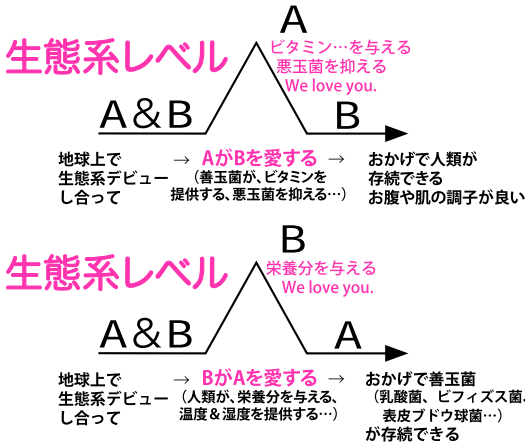
「例えば——」と話し始める僕。「^{たと}果実類^{はな}や^{はじ}野菜類^{ぼく}、^か穀類^かや^{じつ}豆類^いなど^や、^{さい}恵み^いを^く与^るえて^まくれる^め植物種^とと、^{じん}人類^いという^{しゅ}種^さの^あ支^え合^いと^か——



飼^かい^{いぬ}犬^かや^{ねこ}飼^{ねこ}猫^のお^{たの}かげ^しで^{たの}楽^しみ^が増^ふえ^ると^か、^{にゅうぎゅう}乳^に牛^{じかに}や^と鶏^のお^かかげ^でケ^いキ^が食^めべ^られ^ると^か…^あ恵^めみ^を与^あて^てく^れる^め動^{どう}物^{ぶつ}種^{しゅ}と、^{じん}人^い類^の支^{しゅ}え^さ合^あい^とか——



さらには、^{にゅうさんきん}乳酸菌や^{ピフィズスきん}ピフィズス菌、^{ひょうひ}表皮^{ブドウきん}ブドウ球菌を含む、^{めぐ}恵みを^{あた}与えてくれる^{さいきんるい}細菌類の種と、^{じんるい}人類という種の^{しゅ}支え^{ささ}合いと^あか——」



「へえー。つまり—— ある種とある種の間^{しゅ}の恵み^{めぐ}の与え^{あた}合いが、
『Love - Love の関係』^{かんけい}の構築^{こうちく}を実現^{じつげん}して—— そのおかげで、
生態系レベル^{せいたいけい}の3ステップ^{せいらつ}スが成立^るしているのね？」と^ね溜音。

「その通りさ。この『Love - Love の関係』^{かんけい}の構築^{こうちく}のおかげで、^{せい}生
態系レベル^{せいたいけい}のライフ^{たんじょう}が誕生^{さんぞく}し、存続^{ぞく}しているのさ」

「このことが、人間社会^{にんげんしゃかい}レベルのライフ^{らふ}の場合^{ばあい}と似^にているのは、ま
さにフラクタル^{たき}的に^{そうじ}相似^しだからなのね？ ♪」

「その通り！」

音楽 ♪春 Spring 236 に続く

236

「生態系レベルの3ステップの意味についても、第4フレームから第6フレームまでを考え合わせると、わかりやすくなるよ」と僕。



「ええ、よくわかる気がする——」。

それぞれのステップの意味についても、人間社会レベルの3ステップの場合とフラクタル的に相似なんですよ？」と溜音。

「そう、まさに、その通り！」

だから、例えば、第1ステップは——まさに、人間社会レベルにローカルなものと同様にグローバルなものの方があるのと同じように、生態系レベルにもローカルなものと同様にグローバルなものがあることを意味しているんだよ」

「アハッ♪ やっぱり——」

「この『In Out』は、関わり合う種が、どれだけ広く分布してい

るかってこと、いわば、分散度をぶんさんど示しめしているんだ」

「あ！ そうすると—— 例えば、人類という種は、南の果てから北の果てまで生息地を拡大しながら、ほかのさまざまな種と広く関わっているから、どちらかと言ったら『Out』の方向にほうこういるのね？」

「そうだね。

さらには、生息地の広がりに関係なく、例えば、人類がもたらす大気への影響が地球全体に及びうるという意味でも、人類は『Out』の方向にほうこういると思うよ」

「——そうすると、生息地が限られていても、植物種がもたらす大気への影響も地球全体に及びうるから、その意味で植物種も『Out』の方向にほうこういるのね？」

「そうさ。だからこそ、“地球上のすべての生き物や地球環境を含む、まるごと全体が1つの生態系レベルのライフである”という見方も成り立つんだよ。まあ、それがグローバル生態系ってやつだね」

「——じゃあ、グローバル生態系の逆が、ローカル生態系なのね？」

「そうさ。例えば、果物と僕の関係、ランベリーと僕の関係、おなかの中の細菌と僕の関係… が、ローカル生態系だよ」

「よくわかるわ」

「うん。それで、第2ステップは—— ある種が、ほかの種へと恵み、あるいは、脅威を与えるってこと。

具体的には——

“植物種が、二酸化炭素を吸収して酸素を作り出して、動物種にとつて有用な空気を提供してあげる”とか

“ある植物種が、果実を実らせて、ある動物種に食糧を提供してあ

げたり、その動物種が、その果実の中の種を遠くへ移動させて、その植物種の生息地を拡大させてあげたり”とか、

“ある植物種が、ある動物種に巣の材料を提供してあげる”とか…
恵みを与えたり——

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

一方で

音楽イン ♪冬 Winter

“ある動物種が、環境破壊や急激な気候変動を引き起こして、すべての種の生存を脅かしてしまう”とか

“ある動物種が、食糧となる生物を乱獲して減少させたり、その食糧となる生物の減少が、その動物種を飢餓によって減少させたりする”とか

“ある有害な種だけがが増えて、有用な種が減ってしまう”とか…
脅威を与えたりするってこと」

「——うん。そうすると、もちろん—— 恵みが『For』の方向なら、脅威が『Against』の方向なのね？」

「その通りさ。

それで、例えば、人類という種は、ほかの、さまざまな種から、これまで実に多くの恵みを受け続けた。食糧、燃料だけでなく、空気や土壌、海…も含めて実に多くの恵みを」

「ええ、そうね。 そのおかげで繁栄できたのね」

「でも、それは多くの場合、人類が、ほかの、さまざまな種に対して、同時に単に脅威を与え続けていたということでもあった」

「え？」

「例えば、乱獲、樹木の乱伐、環境汚染、急激な気候変動…は、人

類が、単に脅威を与え続けていたことに相当しているんだよ」

「——。——そうね。“かわいたちくん”たちにとっての、乱獲や河川環境の悪化…は、まさに人類による脅威だったのね」彼女は、沈みながら言った。

「ああ」僕も、沈みながら言った。

「——だから、第3ステップは、恵みや脅威を受けた種が“繁栄するか衰退するか”、“存続するか絶滅するか”…のような『Off On』で示される内容を持っているのね？」

「そうさ。もちろん、それは、いずれ“人類自身がどうなるか”ってことでもある」

「——え？」

音楽 ♪冬 Winter 237 に続く

237

「人類という種は、周囲の種に脅威を与え続ければ、周囲の種を衰退させてしまうだけでなく、周囲の種から脅威を与えられ続けることによって、いずれ自身も衰退してしまうってことさ。周囲に脅威を与え続けながらの繁栄は、一時的な偽の繁栄なのさ」と僕。

「いずれ自身が衰退してしまう、偽の繁栄——」と溜音。

音楽フェード・アウト ♪冬 Winter

「そう。まあ、逆に言えば——

音楽イン ♪春 Spring

周囲の種に恵みを与え続ければ、周囲の種を長く繁栄させられるだ

けでなく、周囲の種から恵みを与えてもらい続けることによって、自身も長く繁栄するってことさ。周囲に恵みを与え続けながらの繁栄こそが、長期的な本物の繁栄なのさ」

「後半の逆にとらえた方の説明は、結局、『Love - Love の関係』が作られれば、繁栄しやすくなるってことで、やっぱり人間社会レベルの場合と似ているね？」

「そうさ。何せ、フラクタル的に相似だから——。

つまり、生態系レベルのライフを構成する各種がどれほど長く存続できるかどうかについても、『Love - Love の関係』をどれほど構築できているかが決定するんだよ」

「それは、恋愛関係や経済活動を含む人間社会レベルのライフを構成する各個人がどれほど長く存続するかどうかについて、『Love - Love の関係』をどれほど構築できているかが決定することと同じなのね？ フラクタル的に相似だから——」

「その通りだよ。

この『Love - Love の関係』の構築に、より成功した種が、より長く存続すること—— これは、進化論の根幹である『自然選択〈Natural Selection〉』の本質の1つだと思おうよ。

そもそも自然選択のヒントとなった人為選択においても、まさに、人類との『Love-Love の関係』を構築できた種が選ばれて生き残っているわけだし—— ここにあるのは、ゆるぎない自然法則の1つなのさ」

「——ええ、言われてみれば、そうよね。実際、たとえ、さまざまなハンディキャップを背負っておられても、『Love - Love の関係』

を構築こうちくすることによって、大おおいに活躍かつやくされている方々かたがたが、たくさん
 いらっしやるわけだし—— 生まれうたばかりの赤あかちゃんが、本来ほんらい
 ても弱よわい存在そんざいなのに生存せいぞんし続けつづけられるのは、その保護ほごしや者と『Love -
 Loveのかんけい関係』を構築こうちくするからにほかならないわけだし—— それ
 は、確たしかに的まとを得えた説明せつめいだと思おもうわ」

「そうだね」 そう同意どういした後あと、ふいに、コンパルンクルが赤あかちゃ
 んだころった頃ころのことを思おもい出だした。 ——とても弱よわい！？

「——ま、コンパルンクルちゃんあかの赤あかちゃん時代じだいは、例れい外がいだけだね。
 アハハッ♪」

「アッハッハッ！」 笑わらい合あうふたり——

『Love - Loveのかんけい関係』の

構築こうちく——

これを達成たっせいしている存在そんざいが

なが 長そんぞくく存続そんぞくする

238

瑠音と僕は、しばらく、ぼんやりと水平線の方を眺めていた。

「『Love - Love の関係』の構築が長い存続につながることは、地球上の生態系レベルのライフや人間社会レベルのライフだけに限らず、さらに広い範囲で成り立つ可能性がありそうだよ」僕は、意を決して言った。

「——え？ さらに広い範囲？」聞き返す瑠音。

「そう。——これから、あくまで“もしも”の話をするよ。

“もしも”の——

「ええ、なあに？」

「もしも——あのコンパース一家、あるいは、その祖先たちの出身が、ほかの天体の生態系だったとするよ」思い切って話してみた。

「——」きょんとしている瑠音。

「もちろん、彼女彼女らの出身が地球の生態系である可能性もあるから、あくまで、“もしも”の話だよ」

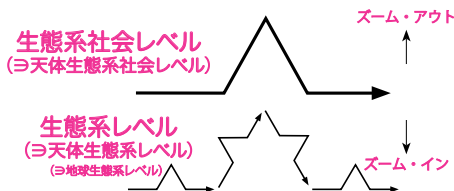
「——ええ、“もしも”の話ね。“もしも”の——」と言いながら数回うなずく彼女。

「もしも、あのコンパース一家、あるいは、その祖先たちの出身が、ほかの天体の生態系だったら、どうなるか？」

「——どうなるの？」

「さらに高次レベルの3ステップ、天体生態系社会レベルを含む、生態系社会レベルの3ステップを考えられることになるのさ。

それは、^{ちきゅうせいいたいけい}地球生態系レベルを含む、^{せいいたいけい}生態系レベルの3ステップ
からズームアウトすることによって^み見えてくるレベルだね」



「——コンパース一家^{いっか}って異星人^{いせいじん}たちだったの!？」^{るね}瑠音は、^{おどろ}驚きながら言った。

「ゴホッ、ゴホッ、ゴホッ… だから、^{ぼく}僕にもわからないよ。あくまで“もしも”^{はなし}の話だよ。“もしも”の——」

「ええ、“もしも”のね。“もしも”の——」^{また}再びうなずきを^く繰り返す^{かえ}彼女^{かのじよ}。

「^{ぼく}僕が言^いいたいのは、生態系社会レベルのライフという“もしも”^{はなし}の話においても、『Love - Love の^{かんけい}関係』を^{こうちく}構築できる^{そんざい}存在こそが^{なが}長く^{そんぞく}存続する^{けつろん}という^か結論が変わらない^{ことさ}ってことさ」

「——」

「なぜって、フラクタル^{てき}的に^{そうじ}相似だから——」

「——」

「それに、^{じっさい}実際、^{ぼく}僕らの^{かんけい}関係が^{いっか}コンパース一家のおかげで^{なが}長く^{そんぞく}存続している^{いちめん}一面を持っていて、^{いっか}コンパース一家が^{ぼく}僕らのおかげで^{なが}長く^{そんぞく}存続している^{いちめん}一面を持っていても、まさに、^{せいいたいけいしゃ}もしもの生態系社会^{かい}レベルにおいても『Love - Love の^{かんけい}関係』を^{こうちく}構築できる^{そんざい}存在が^{なが}長く^{そんぞく}存続する^{けつろん}という^{しじ}結論を^{しじ}支持している——」

「——フフッ♪ もし^{いっか}コンパース一家の^{ほんとう}ルーツが^{ほんとう}本当に、ほかの

天体てんたいだったとしたら、なんだか、おかしいよね？ 私たち、知らぬ
間に、異星人いせいじんたちと『Love - Love の関係かんけい』を築きずいていたことにな
るんですもの——」

「そうだね」

それから、しばらくの間あいだ、コンパス一家いっかとの思い出おもい話でばなしに花はなを咲さ
かせた僕ぼくらは—— 再びふたたび、ふたりして、ぼんやりと水平線すいへいせんの方ほうを眺なが
め続つづけた。

『Love - Love の関係かんけい』の

こうちく
構築——

これを達成たっせいしている存在そんざいが

なが こそく
長く存続する

239

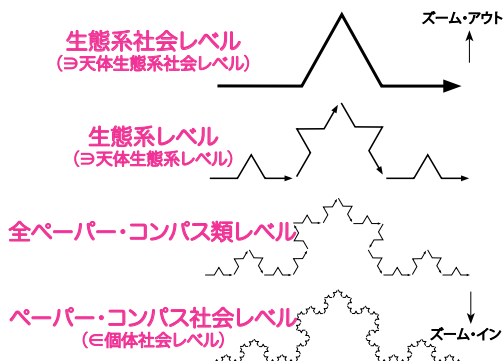
「もしもコンパース一家が異星人だったら説」のおかげで得られる結論は、ほかにもあるよ」話を広げる僕。

「それは、なあに？」聞き返す溜音。

「それは、さまざまなペーパー・コンパス社会たちは、お互いに恵みやフルーツを与え合って『Love - Love の関係』を構築して、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフという、さらに高次レベルのライフに至っているはずだってことさ」

「——え？」

「さまざまなペーパー・コンパス社会たちは、『Love - Love の関係』を構築して、健やかなペーパー・コンパス社会レベルのライフ、生態系レベルのライフ、天体生態系社会レベルのライフに至っているだけでなく、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフにも至っているからこそ、あれほどの高度な科学文明に到達しながら長く存続できて、僕らと出会うこともできていたはずだってことさ」



「——」

「だから、今の地球の科学レベルをはるかに超える高度な科学文明に到達しながら、われわれに出会えるほど長く存続しているライフが、もし実在しているならば、少なくとも、『Love - Love の関係』を構築することの重要性を知っているはずで、本来、さまざまな意味で『Love - Love の関係』を構築しようと実践し続けているはずなんだよ。

例えば、それほど高度な科学文明に到達しているライフが、もし実在して、新たな天体にたどり着いたなら、その暁には——そこに存在する天体生態系との間に『Love - ove の関係』を構築して、天体生態系社会レベルのライフを育むことこそを、第一目標にするはずなんだよ。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

もし、その第一目標を変更するとすれば、新たな天体に存在する“彼らにとっての異星人”が、彼らに対する、あるいは、天体生態系社会レベルのライフに対する脅威となり続けてしまうような、やむにやまれぬ非常事態に限ると思うよ。

健全な免疫細胞たちがもたらす、発熱を含む本格的な活動が、本来、個体レベルのライフが脅威を受け続けるような、やむにやまれぬ非常事態に限るように——」

「——」 再び、きよんとしている溜音。

「だから、“もしも”の話だよ。“もしも”の——」

「ええ、そうよね。“もしも”の話——。——でも、たとえ“もしも”の話だとしても、学べるのが、いっぱいありそうね？」

「ああ、そうだね」

240

その後も、しばらくの間、瑠音と僕は水平線の方を眺めた。

今度は、瑠音が最初に口を開いた。「ねえ、そうすると、今この地球上で生きている種のすべては、個体社会レベルだけでなく、少なくとも生態系レベルにおいて『Love - Love の関係』の構築に成功し続けているのね？」

「うーん。一部は正しいけれど、一部は正しくなさそう」と僕。

音楽イン ♪冬 Winter

「え？ どういうこと？」

「例えば、人類という種と、人類にとって有用な特定の周囲の種——植物たちや動物たち、細菌たちが、『Love - Love の関係』の構築に成功し続けているおかげで、これまでお互いに存続しているという意味では、確かに正しいよ。

でも一方で、人類という種が、別の周囲の種との間で『Love - Love の関係』の構築に失敗し続けている真っ最中でもありうるという意味では、正しくないんだよ。

なぜなら、これまで、決して成功だけが続いてきたわけではなく、失敗もあったから」

「——え？」

「例えば、オオナマケモノとの関係。例えば、ダイカイギウとの関係。例えば、オオウミガラスとの関係。例えば、ブルーバックとの関係。例えば、リョコウバトとの関係。…

そして、例えば、ニホン・カワウソとの関係——。

これらはどれも、人類が『Love - Love の関係』の構築に失敗し

てしまっていた例に、ほかならなかったのさ」

「——」

「例えば、かつて人類とニホン・カワウソが同時に生存していた時代が確かにあった。でも、その時代の関係は決して『Love - Love の関係』ではなかったのさ。なぜなら、結果的に一方だけが存続し一方だけが絶滅してしまったのだから。

一方の種だけが存続して、一方の種だけが絶滅してしまったことは、その“同時に存在していた時代”の人類とニホン・カワウソの関係の大部分が『Love - Love の関係』ではなかったことを証明しているのさ」

「——」

「だから、たとえば現在、この地球上の生態系レベルのライフの中で同時に生存しているからといって、互いに『Love - Love の関係』の構築に成功し続けているとは限らないんだよ。

例えば、たった今、同時に生きていても、ある種とある種の間には構築されている関係が『Love - Hate の関係』や『Hate - Hate の関係』であることも十分にありうるのさ」

「だから、今同時に生きていれば、『Love - Love の関係』の構築に成功し続けているはずだという考えは、正しくないのね——」

音楽 ♪冬 Winter 241 に続く

241

「そうすると、過去に構築されていた『Love - Hate の関係』の例

が、人類とニホン・カワウソの関係だったのね？」と溜音。

「そう。かつて、ニホン・カワウソは、人類が登場するまでは、生態レベルのライフ一部として、長い間『Love - Love の関係』の構築に成功し続けていた。

でも、人類のような未熟で困った種が新たに出現したせいで、『Love - Hate の関係』を強いられた。その結果、絶滅の脅威にさらされ続けただでなく、本当に絶滅してしまったんだよ」と僕。

「——」

「ここにあるのは、決して、“人類が強くて優秀だから”と誇らしく説明すべきことじゃない。とんでもないよ。全く逆だよ。“人類が、自身のこと、今のこと、目の前のことしか考えられないほど愚かで——」かつての自分自身の愚かさと同じ？「知恵を欠いていたから”と説明するべき、大恥、かつ、大損だよ。なぜって、人類が十分に早いタイミングで『Love - Love の関係』の構築を目指す方向へと舵を切っていたならば、ニホン・カワウソは今も存続できていたはずで、人類とニホン・カワウソは、お互いに豊かな恵みやフルーツを得られ続けたはずだから——」

「——。 そっか——」 溜音の声は、しずんでいた。

「——」

「ハア——。 ——もしかしたら、ニホン・カワウソが、せっかく当時の人類をずっと愛し続けてくれていたのに、当時の人類は、ニホン・カワウソをずっと愛してあげなかったことになるのかな。

だとしたら、悲しいね。とつても——」 彼女の目が少し潤んでいるのがわかった。

「——ああ、確かに悲しいね」 もらい泣きしそうになった。

242

うみ べ 海辺がキラキラし 始めている——。

「——ねえ。人類という種が、周囲の種と『Love - Love の関係』を構築することは、周囲の種にとってだけでなく、人類自身にとっても、将来長く存続するために重要なんでしょ？」と溜音。
 「その通りだよ。周囲の種も大事にして『Love - Love の関係』を構築することこそが、本当の意味で人類自身を大事にすることにつながっているんだ。

もし人類という種が自身だけを大事にして、恵みやフルーツを受けとることばかりを望んで、周囲の種へ脅威を与え続ける一方ならば—— 長い目で見て、周囲の種の絶滅によって恵みやフルーツを受け取れなくなることを含めて、脅威を受け続けることになり、人類自身が衰退して、将来長く存続できなくなるから」と僕。

「じゃあ、周囲の種と『Love - Love の関係』を構築するために、私たち人類はどうしたらいいの？」

「僕ら人類がすべきことは、ただ1つ—— 周囲に脅威を与えながら繁栄・存続しようと無理にもがくのではなく、周囲に恵みやフルーツを与え続けながら堂々と繁栄・存続することなんだ。

それは、人類という種自身も、周囲の種も、両方を大事にし続けること、両方を愛し続けることなんだ。

人類という種と周囲の種たちの総和が生態系だから、つまり、

“For 生態系”を目指し続ければいいのさ」

「For 生態系——」

243

「この“^{せいいたいけい}For生態系”の方向^{ほうこう}に進めば、人類^{じんるい}という種^{しゆ}は、周囲^{しゅうい}の種^{しゆ}たちと『Love - Loveの^{かんけい}関係^{こうちく}』を構築^{けんちく}できて、人類^{じんるい}という種^{しゆ}自身^{じしん}も、周囲^{しゅうい}の種^{しゆ}たちも、つまりは、生態系^{せいいたいけい}レベルのライフも^{そんぞく}存続^{ぞんぞく}できるんだよ」と僕^{ぼく}。

「でも—— そんなことが^{ほんとう}本当にできるの？

もし人類^{じんるい}が、周囲^{しゅうい}の種^{しゆ}たちから恵^{めぐ}みやフルーツを受け取りながらこのまま^{はってん}発展^{つづ}し続け^{つづ}れば、それだけでも、周囲^{しゅうい}の種^{しゆ}たちにとって^{きょう}脅^{きょう}威^いになりうるんでしょ？ だったら、人類^{じんるい}という種^{しゆ}は^{はってん}発展^{はってん}しなければいいってことになるでしょうし——。かといって、人類^{じんるい}が^{はってん}発展^{はってん}しないなんて、たぶん^{むり}無理^{むり}でしょうし——。

だとしたら、やっぱり——。——」と溜音^{るね}。

「でも、人類^{じんるい}という種^{しゆ}が^{はってん}発展^{はってん}すること自体^{じたい}は、必ずしも^{かなら}悪^{わる}くないよ。って言うか、むしろ^{はってん}発展^{はってん}するべきなんだよ」

「——え？」

「大事^{だいじ}なのは、^{はってん}発展^{はってん}する際^{さい}の“^{ほうこう}方向”なのさ」

「^{ほうこう}方向？」

「そう。もしその^{はってん}発展^{はってん}する際^{さい}の“^{ほうこう}方向”が—— ^{たと}例えば、より^{おお}大きく、より^{おほ}多く… のような“^{せいちよう}やみくもな成長^{ほうこう}の方向”、つまり、“^{おほ}やみくもな『On』の^{ほうこう}方向”であれば、^{とうぜん}当然^{かいぜん}、改善^{ひつよう}される必要があるよ。第一^{だいいち}、“^{ほうこう}やみくもな『On』の^{ほうこう}方向”が、周囲^{しゅうい}の種^{しゆ}たちにとっても^{じしん}自身^{じしん}にとつても、よいとは^{かぎ}限らないから」

「——。——。——あ、そうよ！ “^{ほうこう}適切な『Off』の^{ほうこう}方向”がよいこともいろいろあるわ。

たとえば、“過剰な採取、過剰な生産、過剰な廃棄量、過剰な化石燃料消費量、過剰な酸素消費量、過剰な二酸化炭素放出量、過剰な人口、過剰なストレス、過剰な食べる量…”

——。それに—— 私の過剰な体重とかも？ アハハッ♪」

“そうなのかい？”というような表情をしてみせた。

“そうなのよ”という表情&うなずきが返ってきた。

「——もし本当に体重が増えすぎているのなら、体重が減ることが健康のために大事なのは確かだよ」

「——」

「もちろん、逆に、もし体重が減りすぎているのならば、体重が増えることが健康のために大事なのも確かだけれど」

「それはない。それはない。私、ダイエットしなきゃ——」

「——まあ、この体重の話は、生産量、人口、ストレス…の話とも本質的に同じで、いずれにしても、“量的な過剰さ”や“量的な過少さ”があったり予想されたりすれば、それらの改善や予防が、自身にとっても、周囲の種たちにとっても、長い存続のために重要なのは確かだよ。

だから、例えば、“量 For 生態系”という発展が大事になるのさ。

ほかにも、“質 For 生態系”という発展——“発達、成熟 For 生態系”も大事だし、“分布、タイミング For 生態系”という発展——“普及、間に合い For 生態系”も大事だよ。

つまり、“『For』の方向の発展”、発展“For 生態系”ならば、多に達成されていいんだよ」

「発展“For 生態系”——」

「そう。例えば、人類という種のみならず、植物、動物、菌類を含む、
 周囲の種たちが長く存続すべく、空気、水、土についての量、質、
 分布、タイミングをほどよく保つ知恵や技術——

例えば、生態系レベルのライフの一部として人類が調和し続ける
 ために、自然エネルギーや燃料や食糧を含む、さまざまなエネルギー
 源についての量、質、分布、タイミングを、ほどよく保つ知恵や技
 術、あるいは、さまざまな人間社会レベルのライフ自身についての
 量、質、分布、タイミングを、ほどよく保つ知恵や工夫—— …

こういった発展“For 生態系”ならば、『Love - Love の関係』の
 構築につながっているから、なおさら歓迎される」

244

キラキラしている海辺に、海鳥たちが集っている——。

「周囲の種と『Love - Love の関係』を構築するために人類がすべ
 きただ1つのこと、“For 生態系”路線を育むこと—— その実現
 のために人類に求められていることは、ほかにもある」と僕。

「それは、なあに？」と溜音。

「全人類を構成している、さまざまな人間社会レベルのライフどう
 しは、本来、もはや互いに争っている場合じゃないってこと——。
 つまり、多様な人間社会レベルのライフたちは、恵みやフルーツを
 与え合いながら健やかな全人類レベルのライフを誕生させているこ
 とが、“For 生態系”を十分に実現させるための前提として求められ

ているのさ」

「そのために、多様な人間社会レベルのライフたちどうしも『Love - Loveの関係』を構築することが求められているのね？」

「そうだともし。

この健やかな全人類レベルのライフは、人間社会レベルのライフの単なる寄り集まり以上の存在だよ。フラクタル的に相似な健やかな人間レベルのライフが、細胞社会レベルのライフの単なる寄り集まり以上の存在であるように——。

この全人類レベルの3ステップと、先ほど話した全ペーパー・コンパス類レベルの3ステップは、同じレベルだよ。(右図)

だから、健やかな全人類レベルのライフのフルーツフルさは、健やかな人間レベルのライフのフルーツフルさと相似であるだけでなく、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフのフルーツフルさと同等になりうる」

「はあー！」

「この健やかな全人類レベルのライフは、話し言葉や書き言葉などを使った高度な情報伝達ができる人間社会レベルのライフたちが元だからこそ、誕生できるんだ。

かつて、DNAやRNAなどを使った高度な情報伝達ができる生体高分子社会レベルのライフたちが元だったからこそ、健やかな(真核)細胞レベルのライフが誕生できたように——。

あるいは、神経伝達物質やホルモンなどを使った高度な情報伝達ができる細胞社会レベルのライフたちが元だったからこそ、健やかな個体レベルのライフが誕生できたように——」

生態系レベル

(by 全人類レベルのライフとしてのヒトという種と多様な他種どうしの
恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築)



全人類レベル

(by 多様な人間社会レベルのライフどうしの
恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築)

“言葉(音声言語、文字…)”
を利用する高度な情報伝達が前提)

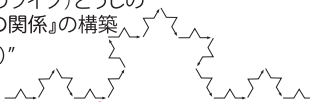


個体社会レベル(≒人間社会レベル)

(by 多様な個体レベルのライフ(≒人間レベルのライフ)どうしの
恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築)

by ときに“言葉(音声言語、文字…)”
を利用する高度な情報伝達)

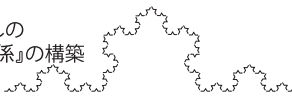
※個体社会レベルのライフ(≒人間社会レベルのライフ)
の単なる集合としての種はこのレベルどまり



個体レベル(≒人間レベル)

(by 多様な細胞社会レベルのライフどうしの
恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築)

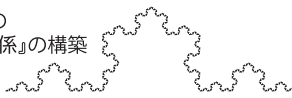
“神経伝達物質やホルモン…”
を利用する高度な情報伝達が前提)



細胞社会レベル

(by 多様な細胞レベルのライフどうしの
恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築)

by “神経伝達物質やホルモン…”
を利用する高度な情報伝達)



(真核)細胞レベル

(by 多様な生体高分子社会レベルのライフどうしの
恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築
“RNA、DNA”を利用する高度な情報伝達が前提)

…

生体高分子社会レベル

(by 多様な生体高分子レベルのライフどうしの
恵みやフルーツの与え合い=『Love-Loveの関係』の構築
by “RNA、DNA”を利用する高度な情報伝達)

…

245

「それじゃあ、話し言葉や書き言葉などを使った高度な情報伝達ができない別の種たちにとって、健やかな全人類レベルと同じレベルのライフを誕生させることは難しいのね？」と溜音。

「そう。たとえ、アリやハチにとっても、チンパンジーやボノボにとっても、イルカやクジラにとっても…難しいのさ。

しかも、話し言葉や書き言葉などを使った高度な情報伝達ができる人間社会レベルのライフたちにとってさえも、健やかな全人類レベルのライフの誕生は可能性の話にすぎず、まだ実現していないことだよ。ただ、それでも——健やかな全人類レベルと同じレベルのライフの誕生は、すでに、この宇宙で実現しているはずだよ」

「——健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフね？」

「そうさ。ペーパー・コンパス社会レベルのライフたちは、話し言葉や書き言葉などを使った高度な情報伝達によって、健やかな全ペーパー・コンパス類レベルのライフの誕生をすでに実現しているはずなのさ。そのおかげで、あれほど高度な科学技術を健全に利用できているはずだから」

「——アハッ♪ さすがよね」

「そうだね。だから、健やかな全人類レベルのライフの誕生は、決して夢物語ではなく、十分に実現可能なんだよ。

いや、単に実現可能だけでなく、実現するべきなんだ——」

「この健やかな全人類レベルのライフの誕生が前提となつて、“For 生態系”を十分に実現できるからね？」

「その通りさ」

246

「——じゃあ、人類という種は、“For 生態系”を十分に実現するために、健全な全人類レベルのライフとして、滅私奉公の精神で奉仕し続けなければいけないこと？」と瑠音。

「——ある意味、正しいけれど、ある意味、間違えているよ」と僕。

「え？ どういうこと？」

「うん。正しいと言うのは——例えば、実際に植林を実施したり、実際に環境汚染を浄化したり、実際に環境への負担がより少ない産業やエネルギー源を育てたり、実際にリユースやリサイクルをしたり…を含めて、生態系レベルのライフのためになる活動を実現するために、健全な全人類レベルのライフとして、時間やパワーの投資が不可欠になるからだよ。

別の見方をすれば——健全な全人類レベルのライフは、生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在、生態系レベルのライフの重要部分として活躍できるかもしれないってことなんだけどね」
「生態系レベルのライフの重要部分——」

「そう。生態系レベルのライフの内外の全体像を常に把握して、危機を察知して回避したり、キズを保護して早い回復を促したり、さまざまなコンディションを調べたり…生態系レベルのライフをしっかり守って存続させるべく、より迅速に、より強力に、よりしなやかに対応できる立場のことさ。それこそ、人体の中の頭脳、脳神経系のように——。

だから人体における頭脳、脳神経系は、厳密には、さまざまな神経細胞社会レベルのライフが支え合って生まれている、健全な頭

のうしんけいけい
脳神経系レベルのライフと^よ呼びうる、^{さいぼうしゃかい}細胞社会レベルより^{こうじ}高次レベルの存在、^{そんざい}人間レベルより^{ていじ}低次レベルの存在として、^{そんざい}人間レベルのライフの『アタマ』の^{ほうこう}方向の^{じゅうようぶぶん}重要部分を担っていたことになる——」

「それと^{そうじ}相似な存在が、^{にんげんしゃかい}人間社会レベルより^{こうじ}高次レベル、^{せいたいけい}生態系レベルのより^{ていじ}低次レベルの^{すこ}健やかな^{ぜんじんるい}全人類レベルのライフ——」

「そう。^{せいたいけい}生態系レベルのライフの^{ずのう}頭脳、^{のうしんけいけい}脳神経系としての、^{すこ}健やかな^{ぜんじんるい}全人類レベルのライフの^{ぐたいてき}具体的な^{たいおう}対応には、^{たと}例えば、^{きこうへんどう}気候変動の^{ちようこう}兆候や^{げんいん}原因を^{ほや}モニターして^{ほや}早め^{たいしよ}早めに対処することで^{きうげき}急激な^{きこうへん}気候変動を^{どう}予防したり^{よぼう}改善したりするとか、^{かいぜん}宇宙からの^{うちゆう}隕石の^{いんせき}衝突の^{しやうとつ}可能性を^{せい}早めに^{ほや}察知して^{さつち}上手に^{じやうず}対処するとか、^{たいしよ}公害や^{こうがい}砂漠化が^{さぼくか}進んでいる^{すす}地域を^{ちいき}モニターして^{ちえ}知恵や^{ぎじゆつ}技術を出し^あ合いながら^{けんぜん}健全な^{しぜん}自然を取り^{もど}戻すとか……によって^{せいたいけい}生態系レベルのライフを守ることも^{まも}含まれるよ。——だから、^{せいたいけい}生態系レベルのライフの『アタマ』の^{ほうこう}方向の^{じゅう}重要部分としての^{ようぶぶん}大きな^{おお}貢献に^{こうけん}ともな^{じっさい}って^{じかん}実際に^{しやうひ}時間や^{しやうひ}パワーを消費する^{いみ}という意味では、^{めつしぼうこう}“滅私奉公の^{せいしん}精神での^{ほうし}奉仕”は^{ただ}正しいのさ」

「そうね」

「そして、^{まが}間違えている^{なに}というのは、^{すこ}何より^{ぜんじんるい}健やかな^{すこ}全人類レベルのライフ^{じしん}自身^{せいたいけい}生態系レベルのライフの^{いちぶ}一部そのものだからなんだ。それこそ、^{すこ}健やかな^{ずのうしんけいけい}頭脳神経系レベルのライフが^{じんたい}人体の^{いちぶ}一部そのものであるように——」

「——」

「“一部そのもの”であることが何を意味しているか——」

「——何を意味しているの？」

「それは、^{せいたいけい}生態系レベルのライフのためであることが^{どうじ}同時に^{すこ}健やか

ぜんじんるい
な全人類レベルのライフ自身のためでもあることを意味しているの
さ。それこそ、じんたい
人体のためであることがとうじ すこ
同時に健やかなずのうしんけいけい
頭脳神経系
レベルのライフ自身のためでもあるように――。

つまり、せいたいけい
生態系レベルのライフ自身が生きるためにも健やか
ぜんじんるい
な全人類レベルのライフ自身が生きるためにも―― それが“For
せいたいけい ほんらい い み ないよう
生態系”が本来意味する内容なんだよ。だから、自分自身のため
もあるという意味で“For せいたいけい ろせん えいし ぼうこう
生態系”路線は“榮私奉公”であるから、
“For せいたいけい ろせん めつし ぼうこう
生態系”路線が“滅私奉公”であるというのは正しくないのさ」
「――ええ、そうね♪」

「さらに、“For せいたいけい
生態系”には、め ぎき しょうらい
目先の将来のためにもながい しょうらい
将来の
ためにもという意味も含めることができる。このあたりのことは、
せいめいなんじゅうおくねん れきし おし
生命何十億年もの歴史も教えてくれているんだよ」

「――え？」

247

なんじゅうおくねん まえ いま ちきゅうじょう
「何十億年も前から今まで、地球上でライフが存続している。

音楽イン ♪ Birthtime

さいしよ たんじょう たよう すこ せいたいこうぶん し
最初に誕生した多様な健やかな生体高分子レベルのライフは――
じぶん じしん せいたいこうぶん ししゃかい
自分自身のためにも生体高分子社会レベルのライフのためにもな
るように、なおかつ、め ぎき しょうらい
目先の将来のためにもながい しょうらい
将来のためにもな
るように成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築で
きて、すこ せいたいこうぶん ししゃかい
健やかな生体高分子社会レベルのライフの一部として、これ
までながい せんぞく
長く存続できた。

つぎ たんじょう すこ たよう せいたいこう ぶ ししゃかい
次に誕生した健やかな多様な生体高分子社会レベルのライフは——
じぶん じしん さいぼう
自分自身のためにも細胞レベルのライフのためにもなるように、
なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるように
せいじゅく
成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築できて、健や
かな さいぼう
かな細胞レベルのライフの一部として、これまでなが さんぞく
長く存続できた。

つぎ たんじょう すこ たよう さいぼう
次に誕生した健やかな多様な細胞レベルのライフは——
じぶん じしん さいぼうしゃかい
自分自身のためにも細胞社会レベルのライフのためにもなるよう
に、なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるように
せいじゅく
成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築できて、健や
かな さいぼうしゃかい
かな細胞社会レベルのライフの一部として、これまでなが さんぞく
長く存続できた。

とく すこ しんけいさいぼうしゃかい
特に健やかな神経細胞社会レベルのライフは——
じぶん じしん ずのうしんけいけい
自分自身のためにも頭脳神経系レベルのライフのためにもなるよ
うに、なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるよ
うに せいじゅく
うに成熟していたおかげで、『Love - Love の関係』を構築できて、
すこ ずのうしんけいけい いちぶ なが さん
健やかな頭脳神経系レベルのライフの一部として、これまで長く存
ぞく
続できた。

つぎ たんじょう すこ たよう さいぼうしゃかい すこ
次に誕生した健やかな多様な細胞社会レベルのライフ、健やかな
ずのうしんけいけい
頭脳神経系レベルのライフは——
じぶん じしん こたい にんげん
自分自身のためにも個体レベルのライフ (≒人間レベルのライフ)
のためにもなるように、なおかつ、めきき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来
のためにもなるように せいじゅく かん
成熟していたおかげで、『Love - Love の関
けい こうちく すこ こたい にんげん
係』を構築できて、健やかな個体レベルのライフ (≒人間レベルの
ライフ) のいちぶ なが さんぞく
一部として、これまで長く存続できた。

つぎ たんじょう すこ たよう こたい にんげん
次に誕生した健やかな多様な個体レベルのライフ(≡人間レベル

のライフ)は——

じぶん じしん こたいしゃかい にんげんしゃかい
自分自身のためにも個体社会レベルのライフ(≡人間社会レベルの
ライフ)のためにもなるように、なおかつ、めさき しょうらい
目先の将来のためにもなが しょうらい
長い将来のためにもなるようにせいじゅく
成熟していたおかげで、『Love -
Loveの関係』をかんけい こうちく すこ こたいしゃかい
構築できて、健やかな個体社会レベルのライフ(≡
にんげんしゃかい いちぶ なが そんぞく
人間社会レベルのライフ)の一部として、これまで長く存続できた。

とく すこ にんげんしゃかい
特に健やかな人間社会レベルのライフは——

じぶん じしん ぜんじんるい
自分自身のためにも全人類レベルのライフのためにもなるように、
なおかつ、めさき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるようにせい
成熟していればこそ、そのおかげで『Love - Loveの関係』をかんけい こうちく
構築でき、すこ ぜんじんるい いちぶ なが
健やかな全人類レベルのライフの一部として、これからも長
くそんぞく
存続できる。

これまでたんじょう すこ たよう こたいしゃかい にん
誕生した健やかな多様な個体社会レベルのライフ(≡人
げんしゃかい
間社会レベルのライフ)や、これからたんじょう すこ ぜんじん
誕生するだろう健やかな全
るい
人類レベルのライフのライフは——

じぶん じしん せいたいけい
自分自身のためにも生態系レベルのライフのためにもなるように、
なおかつ、めさき しょうらい なが しょうらい
目先の将来のためにも長い将来のためにもなるようにせい
熟しつづけていればこそ、そのおかげで」

「『Love - Loveの関係』をかんけい こうちく せいたいけい いち
構築できて、生態系レベルのライフの一
ぶ なが そんぞく かのじよ あか い
部として、これからも長く存続できるのね！」彼女が明るく言った。

「そうさ。だから、このようにくうかんでき じかんてき ひろく
空間的にも時間的にも広く『For』
になるようにせいじゅく
成熟しているおかげで、すなわち——

“For ^{せいたいこうぶんし}生体高分子”

“For ^{せいたいこうぶんししゃかい}生体高分子社会”

“For ^{さいぼう}細胞”

“For ^{さいぼうししゃかい}細胞社会”

“For ^{ずのうしんけいけい}頭脳神経系”

“For ^{こたい}個体”

“For ^{にんげん}人間”

“For ^{こたいしゃかい}個体社会”

“For ^{にんげんししゃかい}人間社会”

“For ^{ぜんじんるい}全人類”

“For ^{せいたいけい}生態系”

“For ^{みじか しょうらい}短い将来のライフ”

“For ^{なが しょうらい}長い将来のライフ”

...

を含む For『In』 & For『Out』へと成熟せいじゅくしているおかげで——

つまり、For All Life へと成熟せいじゅくしているおかげで—— 『Love-

Love ^{かんけい}の関係を構築こうちくしながら、これまで、みんなすこ健やかになが長くそんぞく存続

できていたし、これからも、みんなすこ健やかになが長くそんぞく存続できるんだ」

「For All Life —— それは、何十億年なんじゅうおくねんものライフの歴史れきしが教おしえてくれる、とびっきりの知恵ちえなのね！」

「そうさ。この For All Life の知恵ちえには、ライフにおける、あらゆる問題もんだいを根底こんていから解消かいしょうする可能性かのうせいもある。

だから、For All Life の知恵ちえこそが、究極きゅうきょくの意味であり、ライフのパズルを解とく究極きゅうきょくのカギなんだよ。きっと」

「へえ、すごい」

「For All Life の知恵ち え じっせんの実践、For 『In』 & For 『Out』 の知恵ち え じっせんの実践
の典型的な例てんけいてき れいが、植物しょくぶつがフルーツていきょうを提供することだよ。

フルーツの中の種なか たねが For 『In』、フルーツの中の果皮なか か ひが For 『Out』
だから」

「へえー♪ フルーツは、For All Life の知恵ち え じっせんの実践しゅうじょうの象徴しやうちゆうなのね♪」

「そうさ。しかも、フルーツは、究極きゅうきょくの意味い みの象徴しやうちゆうでもあり、ライ
フのパズルとを解く究極きゅうきょくのカギしやうちゆうの象徴しやうちゆうでもあるよ♪」

「すごい♪」

For All Life ——

それは、何なんじゅうおくねん十億年もの

ライフの歴史れき しが教おしえてくれる

とびっきりの知恵ち え

248

海^{うみ}辺^べのキラキラが輝^{かがや}きを増^ましている——。

「For All Life—— すてきね。

この For All Life のおかげで、『Love - Love の^{かんけい}関係^{こうちく}』を構築^{くわく}でき^るるんですもの^ね』と^ね溜音^ね。

「そうだね。地球^{ちきゅうじょう}上の何^{なん}十億^{じゅうおく}年^{ねん}の歴史^{れきし}も^も持つ^もライフ^{らいいふ}自身^{じしん}が示^{しめ}している^{ほうこう}方向^{ほうこう}だから、なおさら——」と僕^{ぼく}。

「そうね。もしかしたら異^い星^{せい}人^{じん}だ^だったか^かもしれない^{いっか}コンパ^{いっか}ース^{いっか}一^{いっか}家^{いっか}が示^{しめ}している^{ほうこう}方向^{ほうこう}でも^もあるから、さらに、なおさら—— アハッ♪」

「アハハッ。そうだね。

まあ、それは^{すこ}健康^{けん}やかな^{ぜん}全^{ぜん}ペ^ぺーパ^ぱー・コン^{こん}パス^{ぱす}類^{るい}レ^るベル^べの^のライフ^{らいいふ}の^の出^{しゅつ}身^{しん}が地球^{ちきゅう}であ^あって^もなく^もても、い^おず^なれ^だに^よしても^も同^{おな}じ^だよ。

それでも、この For All Life の知^ち恵^えは、人^{じん}類^{るい}が、将^{しょう}来^{らい}、健^{けん}や^やかな^な全^{ぜん}人^{じん}類^{るい}レ^るベル^べの^のライフ^{らいいふ}を^を誕^{たん}生^{じょう}さ^させ、天^{てん}体^{たい}生^{せい}態^{たい}系^{けい}社^{しゃ}会^{かい}レ^るベル^べの一^{いっ}員^{いん}と^とな^なり^りな^なが^がら^ら宇^{うち}宙^{ちゅう}に^に進^{しん}出^{しゅつ}す^する^る際^{さい}にも^も必^{ひつ}須^すに^にな^なる^るほ^ほど^ど普^ふ遍^{へん}的^{てき}で^で大^{たい}切^{せつ}であ^ある^るの^のは^は確^{たし}か^かだ^だよ。そ^その^い意^い味^みで、For All Life の知^ち恵^えは、未^み来^{らい}が^が教^{おし}え^えて^てく^くれる^る知^ち恵^えであ^ある^ると言^いえる^るか^かも^もし^しれ^れない——」

「すてき♪」

「For All Life の知^ち恵^え——『In』と『Out』の^{りょうほう}両^{りょう}方^{ほう}の^ちた^ちめ^めに^にという^{いう}知^ち恵^えの^え実^{じつ}践^{せん}例^{れい}は、現^{げん}在^{ざい}の^{にんげん}人^{にん}間^{げん}社^{しゃ}会^{かい}にお^おいて^も、い^いろ^ろい^いろ^ろの^{みと}認^めら^られる^よよ。

例^{たと}え^えば、交^{こう}通^{つう}ル^るール^{ール}を^を守^{まも}る^るこ^こと^とが、自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}と^と相^あ手^ての^{りょうほう}両^{りょう}方^{ほう}を^を守^{まも}る^るた^ため^めに^に役^{やく}立^だつ^つと^とか——手^て洗^{あら}い^いや^やマ^まス^すク^くの^{ちやくよう}着^{ちやく}用^{よう}を^を含^{ふく}む^む衛^{えい}生^{せい}管^{かん}理^りが、自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}と^と周^{しゅう}圍^いの^{りょうほう}両^{りょう}方^{ほう}の^{かんせん}感^{かん}染^{せん}予^よ防^{ぼう}につ^つな^なが^がると^とか——^{らんかく}乱^{らん}獲^{かく}し^しない^いこ^こと^とを^を含^{ふく}めて^て食^{しょく}糧^{りょう}資^じ源^{げん}を^を大^{だい}事^じに^に守^{まも}る^るこ^こと^とが、自^じ国^{こく}と^と他^た国^{こく}の^{りょうほう}両^{りょう}方^{ほう}、あ

るいは、人類と他種の両方、あるいは、目先と遠い将来の両方のためになるとか—— …

つまり、健全な社会においてルールや約束やエチケットを守ることは、たいてい、『In』と『Out』の両方のためになっているよ」
「確かに、そうよね♪」

249

しばらくの間、水平線の方のぼんやり眺め続けていた瑠音が口を開いた。「そうすると—— わたしたちは、みんながみんな、決まりきった同じことをしなければならないってことになるのかなあ。

だとしたら——」

「——だとしたら？」と僕。

「窮屈というか、味気ないというか、つまらないというか…」 明らかに彼女は、しずんでいた。

「もし、みんながみんな、本当に、決まりきった同じことをしなければならぬだけならば、確かに、窮屈で、つまらないよ。

でも、ここにあるのは、ちょっと違うんだよ」

「どんなふうに違うの？」

「まず、基本的には、それぞれが、心底やりたくて自分自身を喜ばせることを自由に選んで、好きなようにやっていいんだよ。

しかし、その自由に選んだことは、単に自分自身を喜ばせるだけであれば、タイミングや状況…によっては周囲のみんなを悲しませ

たり困らせたりしうる。その場合、もし、無配慮や無思慮のままに
続けたなら、最終的に、自分自身が、非難されたり、罰せられたり、
傷ついたり、病んだり…結局、自分自身も、つらくなる。

でも、もし、その自由に選んだことを、タイミングや状況を見計らっ
て、配慮や思慮を加えることによって、自分自身だけでなく周
囲のみんなも喜ぶことへと洗練させたり成熟させたりできれば——
最終的に、自分自身と周囲のみんなが、安心だったり、健やかだっ
たり、満足だったり、幸せだったり…を含めて、結局、自分自身も
周囲のみんなも両方が、うれしいことになる。

つまり、For All Life の知恵——『In』と『Out』の両方のために
という知恵の実践例として、個人の健やかな自己実現も挙げられる
のさ。この健やかな自己実現とは、フルーツのように For『In』&
For『Out』の存在になること、いわば自己フルーツ化だよ。

だから、ここにあるのは、“みんな決まりきった同じことをしな
ければならない”といった窮屈でつまらない制限というより——
このような成熟 For『In』& For『Out』、成熟 For All Life を実現
できれば、お互いに、喜びを保てたり、喜びを増やせたりできるよっ
ていう、のびやかな、おいしい知恵なんだよ。フルーツのように、
おいしい知恵——

「よかった♪ For All Life の知恵は、のびのびしていて、フルー
ツのように、おいしいのね♪」

「そう。しかも、成熟 For All Life という条件を満たせば、多様な
自己実現、多様な“ライフのあり方”が保証されていることは、生態
系レベルのライフを構成する多様な種が教えてくれることでもある」

「え？」

250

「フルーツを提供する多様な植物種を含めて、生態系レベルのライフを構成する種がこんなに多様性にあふれていることは、成熟 For All Life の実現と、“ライフのあり方”の限りない多様性の実現、限りない多様な自己実現が両立することを保証しているのさ。

成熟 For All Life を実現している生物種が、こんなに多様性にあふれながら生態系レベルのライフを構成しているように、成熟 For All Life を実現している人生も、健全な自己実現、自己フルーツ化を果たしている人生も、多様性にあふれながら人間社会レベルのライフを構成できるのさ。フラクタル的に相似だから——」と僕。

「——よかったあ♪」と溜音。「そうすると、成熟 For All Life のおかげの『Love - Love の関係』の構築と、人生が限りなく多様であることも、両立できるのね？」

「その通り。成熟 For All Life によって『Love - Love の関係』を構築しながら、人生、人間レベルのライフは、いくらでも多様性にあふれられる。種、個体社会レベルのライフが、いくらでも多様性にあふれられるように——。

しかも、このように、いくらでも多様性にあふれられるのは、生態系レベルのライフ、人間社会レベルのライフ、細胞社会レベルのライフ…そして、未来の健やかな全人類レベルのライフも同じさ」

「相似だからね？」

「そう。その通りだよ！」

251

「ねえ、^{こうこうじだい}高校時代の、^{わく}7つのワクワク棒が、いろんな“ライフのあり方”^{かた}を^{おし}教えてくれるだろうって話、^{おぼ}覚えている？”と^る留音。

「ああ、^{おぼ}覚えているよ」と^{ぼく}僕。

「あの日、^ひ私たちが^あ挙げた“ライフのあり方”^{かた}が結局すべて『For』^{けっきょく}ライフの例になっていることに気づいたけれど、あの日の『For』^{れい}ライフと今日の“成熟 For All Life”^{せいじゅく}は、似てるけれど意味は違うよね。——これらの2つは、^{また}全く無関係かしら？」

「いや、^{おお}大いに^{かんけい}関係あると思うよ。^{おも}」

なぜって、1つは、^{ぼく}僕らが^{こうこうじだい}高校時代に^あ挙げた、いろんな『For』^{せいじゅく}ライフも、^{せいじゅく}成熟 For All Life を^{じつげん}実現できてはじめて^{ほんもの}本物になるから。

もし、^{せいじゅく}成熟 For All Life を^{じつげん}実現できないまま、“^{せいたいけい}生態系レベルの^{にんげんしゃかい}人間社会レベルのライフ、^{さいぼうしゃかい}細胞社会レベルのライフ…”^を害し^{がい}つづ^{つづ}けていれば、^{なが}長い目で見て、^めしっ^めぽ返されて、^{がえ}喜び、^{よろこ}楽しみ、^{たの}快適さ…^{かいてき}にあふれた『For』^をライフを^{とうぜん}失うのだから当然だよ。

「あ、そっか——。それもそうよね」

「それから、もう1つの理由^{りゆう}は、『For』^{せいじゅく}ライフが、^{せいじゅく}成熟 For All Life の^{じつげん}実現につながりやすいから。

例えば、“^{たと}今、^{いま}心地よくて^{ここち}ハッピー”であれば、それだけ^たストレスも^{すく}少なく^{すく}リラックスできているってことで、“^{あたま}頭と^{からだ}体の^{けんこう}健康”や^{こころ}“心の^{けんこう}健康”^につながりやすい。それは、“^{にんげん}人間レベルのライフの^{ため}ため”^になりやすいのはもとより、“^{さいぼうしゃかい}細胞社会レベルのライフの^{ため}ため”^にもなりやすい。

それに“^{いま}今、^{ここち}心地よくて^{ここち}ハッピー”なら、それだけ^{じぶんじしん}“自分自身も、

周囲の誰^{だれ}かも生きる^{いき}ため”に活躍^{かつやく}しやすい。それは結局^{けっきょく}、“人間社会^{にんげんしゃかい}レベルのライフのため”につながりやすいってことでもある」

「アハッ♪ そうね。——すると、同じ理由^{おなじりゆう}で、『For』ライフは、“生態系^{せいたいけい}レベルのライフのため、未来^{みらい}の健やかな^{すこ}全人類^{ぜんじんるい}レベルのライフのため、長い^{なが}将来^{しょうらい}のため”にもつながりやすくなるのね？」

「そうさ。まず自分^{じぶん}自身が『For』ライフを営めれば、心身^{いしん}がイキイキ、ウキウキ、ワクワクし、さまざまなライフ——人間^{にんげん}レベルのライフ、人間社会^{にんげんしゃかい}レベルのライフ、生態系^{せいたいけい}レベルのライフ…そして、未来^{みらい}の健やかな^{すこ}全人類^{ぜんじんるい}レベルのライフのために活躍^{かつやく}しやすくなる。つまり、このように『For』ライフが成熟^{せいじゅく} For All Life の実現^{じつげん}につながりやすいことも『For』ライフと For All Life を大いに関連させている」

「ええ、そうね♪」

252

相変^{あい}わらず、同じ^{おな}ペースで繰^くり返^{かえ}される波^{なみ}——。

ザブーン、ザザザシュー …

「ねえ、そうすると、逆^{ぎやく}に『Against』ライフに陥^{おちい}ってしまったら、成熟^{せいじゅく} For All Life の実現^{じつげん}も危^{あや}うくなるのかしら？」と囁^{ささ}音^ね。

「うーん——」 …… 「それは、結局^{けっきょく}—— そのあと、どんな方向^{ほうこう}を目標^{めざ}すか次第^{しだい}、つまり、その後の選^ご択^{せんたく}次第^{しだい}じゃないかなあ」と僕^{ぼく}。

「選択？」

「そう。そりゃあ、『For』ライフに比べれば、『Against』ライフの方が、リスクが大きいと思うよ。

だって、例えば、悲しみやつらさ…をためこんで長くくすぶらせ続けてしまえば、ストレスが蓄積して健康を害してしまったり、“何か”や“誰か”を傷つけることにつながってしまったり…未熟な Against Life モードをとりやすいのは確かだろうから。

でも、でもだよ——。たとえば、悲しみやつらさ…に遭遇したとしても、上手に対処して、心底さっぱりした上で、次の目標、楽しみ、ワクワク…を育むように方向転換する“ライフのあり方”を選択するならば、未熟な Against Life モードを外れ、成熟 For All Life を実現できるんだよ。

この“ライフのあり方”の選択は、まさに、“人間レベルの3ステップ”と『アタマ』の方向の所産である“～しよう”の意志や“～するのがよい”の知恵が関わっていることだよ。

この知恵には、悲しみやつらさ…からくる、モンモン、ウツウツ、クヨクヨ…を含むストレス反応自体が細胞社会レベルの3ステップの所産にすぎず、呼吸法などでコントロールできるという認識も含まれているはずだよ」

「——ええ、そうね♪」

音楽 ♪ Reconstruction 253 に続く

253

「それに、成熟 For All Life を実現するために、やむなく甘受すべき“一時的な『Against』ライフ”も、きっとあるはずだよ。

たとえば――

おじいちゃんが本気で怒りながら“人生はこれからなんじゃ”と励ましてくれたときの心の痛み

休養の大切さを教えてくれた、スランプのときの苦しさ

ペース配分の大切さを教えてくれた、急な坂を上る際のしんどさ

コンパルンクルに“思いやりの心”や“楽しみにする心”の大切さ

を教えてあげることとなった、試験期間中の君に会うのを我慢させるつらさ…とか？」と僕。

「フフッ♪ そうよね。

こういった一時的な『Against』ライフたちには、どれも成熟 For All Life を実現するまでの起点や転機、試練の意味があるのね。

ほかにも――

子供があるかたみ身につける頃の、転倒の際の痛み

健康のために乗り越える、採血や点滴などの際の針の痛み

元気な赤ちゃんを生むために乗り越えるつわりのつらさ…も同じで」と溜音。

「そうさ。だから――痛み、つらさ、しんどさ…は、なくてすむなら、それに越したことはないけれど、これらを甘受する一時的な『Against』ライフは、ときに、成熟 For All Life を実現するまでの貴重なプロセスになりうるのさ」

「プロセス——」

「そう。それは確かに“プロセスなりうる”ということにすぎず、ときに、こういった一時的な『Against』ライフが、心の傷をもたらし続けたり、さらなる悲劇の原因になったりすることもありうる。

そうなるかならないかの分岐点は何かといえば——

“ある『Against』ライフを経験した際に、成熟 For All Life 志向を貫けるかどうか”なんだよ」

「——ええ、そうね。 ——。 ——あ、そうだ！

そういう意味でも、可能な限り、イヤな連鎖を断つこと——

“『Against』の連鎖を断ち切ること”は大切になるよね？」

「え？——」・・・「——もしかして、あのこと？」

「そう。

——ちよっぴり見直したでしょ？ アハハッ♪」

すごく見直した。

可能な限り、『Against』を連鎖させないこと——

彼女が、かつて、クラスメートに向けて取っていた、あの態度が、これほど、すてきだったとは——。

音楽フェード・アウト ♪ Reconstruction

254

さらに輝きを増している海辺のキラキラ——。

しばらくすると、瑠音が口を開いた。

「確かに、『Against』を連鎖させないこと”は、単なる理想にすぎないかもしれないし—— ときに、心の痛みを抱え続けざるをえなかったり、ときに、はっきりとした主張のせいで議論が終わらなくなったり、ときに、イライラが判断ミスを引き起こしたり…もありうるよ。『Against』ライフを、一時的なプロセスに、なかなかできないせいで——。

音楽イン ♪ Love

でも、もし、みんなが最初から、少しずつでも、そういう“優しさ”とか“ゆるす気持ち”とかを持ち寄って、『Against』を連鎖させないように、プチ『Against』のうちにイヤな連鎖を断ち切る努力をしていたら—— きつと—— 何ていうか、——いいよね？」

「そうだね。

『Against』を連鎖させないためには、はじめから、逆の『For』を連鎖させ続けていること、“優しさ”や“ゆるす気持ち”などの『For』を与え続けていることが、一番効果的なんだろうね」

・・・ 「——あ！」 僕は、思わず声を上げた。

「え？ どうしたの？」

「ゆるすって、“forgive”じゃん。この“forgive”には、“与えるために”の意味だけでなく、“『For』を与える”の意味もありそうだよ」

「アハッ♪ おもしろーい♪ 確かに、そうらしいわよね」

「だろだろ？」

音楽 ♪ Love 255へ続く

255

「ときには、あっさりゆるす方が、お互い早くすっきりする場合がありますよね？ もちろん、ときには、安易にゆるしていけない場合もあるけど——」と溜音。

「ああ、そうだね」と僕。

「——あ、そう言えば、『ゆるすのは自分のためでもある』という言葉の前に本で読んだわ。そうすると、『For』を相手だけでなく自分自身にも与えることが“ゆるす forgive”だったのね。

——。 ——あ！」

「あ！」僕は、ほとんど同時に、“あ！”を発した。

「忘れるが“forget”だと気づいたんでしょ？」と彼女。

「そうだよ。“forget”には、きっと“『For』を得る”って意味もあるよ。“得るために”だけでなく——。だから、相手や自分が『For』をゲットすることが、“忘れる forget”だったんだよ」

「そうね。ときには、あっさり忘れる方が、お互い早くすっきりする場合がありますわ。もちろん、ときには、決して忘れていけない場合もあるけど——。確かに『忘れるのは相手のためでもある』って言葉も、どこかで聞いたことがある——」

「そうすると—— “ゆるす forgive”と“忘れる forget”は、両方も、結局、自分や相手に『For』を提供することにつながっているという意味で、同じじゃん」

「おもしろい♪ それに、そもそも“忘れる”には“ゆるす”の意味があるようだよ。——そうよ。“忘れる forget”と“ゆるす forgive”は、本来切っても切れない関係にあるのよ。だから、“忘れながら、ゆ

るす”、“ゆるしながら忘れる”が本来ふつうなのよ」

「なるほど」

音楽 ♪ Love 256 へ続く

256

「もしかしたら、“忘れながら、ゆるす”、“forgetしながら forgive
する”は—— “『For』を得ながら『For』を与える”という、より
一般的な知恵の1例なのかもね？」と僕。

「——。——ええ、きっと、そうよ！

たと
例えば——

自分が喜びながら誰かを喜ばせる。

自分が楽しみながら誰かを楽しませる。

すてきな思い出を作りながら、すてきな思い出を作らせてあげる。

いつか実現したい夢や目標を見つけながら、いつか実現したい夢
や目標を見つけさせてあげる。

...

どれも同じなんだわ」と溜音。

「そうだね。どれも、“忘れながら、ゆるす”、“忘れながら忘れさせ
てあげる”と本質的に同じで、『For』を得ながら『For』を与えて
いることになっているんだね」

「そうよ。

それに、このような自分自身のためになりながら相手のためになっ

ているという一般的な知恵は、まさに、For All Life 志向にも適っているわ♪」

音楽フェード・アウト ♪ Love

「そうだね。自分のためにも、相手のためにも、つまり、For『In』& For『Out』 志向という意味の For All Life 志向——」

「そうよ」

「つまり——

例えば、忘れながら忘れさせたり、楽しみながら楽しませたり、喜びながら喜ばせたり…によって、『For』を得ながら『For』を与えること、自分と相手の両方のためになることが可能であり——
そのために『For』こそを与え続けられれば、『Against』の連鎖を断ち切りながら For All Life 志向を貫くことができる—— そのような深い考えが、かつて君がクラスメートに向けて取っていた、あの態度の奥にあったんだね」

「ええ、そうなのよ。

——って、そんなわけないでしょ？ フフッ♪」 はにかむ彼女。

257

ザブーン、ザザザシュー…

海辺のキラキラがさらにさらに増している——。

「そうすると—— 自分自身の『For』ライフのおかげで成熟 For All Life が実現しやすくなる一方で、たとえ『Against』ライフに

おちい 陥ってしまったとしても、^{じょうず たいおう}上手に対応することで、For All Life 志
こう つらぬ 向を貫けるのね？」と溜音。

「そうさ。しかも、たとえ『For』ライフであっても、あくまで For
All Life 志向^{しこう つらぬ つづ}を貫き続けることが重要になるよ。なぜって、『For』
ライフが成熟^{せいじく} For All Life を実現^{じつげん}しやすいのも、あくまで単^{たん}に“実
げん 現しやすい”ってだけの話で、たとえ『For』ライフであっても、
へた 下手すりゃ、未熟な Against Life モード^{いた}に至^{いた}ってしまうのだから—
—」と僕。

「—ええ。言^いわれてみれば、確^{たし}かにそうよね。

いま じぶん たの 今の自分^{いま じぶん たの}の楽しみが、将来^{しやうらい}の自分を困^{こま}らせてしまったり、目の前^{め まえ}
の喜び^{よろこ}が周囲^{しゅうい}の迷惑^{めいわく}になってしまったり…もありうるもんね」

「そう。その通り。

それで、一方^{いっぽう}、次^{つぎ}のようなことも言^いえる。

“自分^{じぶん}自身^{じしん}の For All Life 志向^{しこう}が高^{たか}まれば、そのおかげで周囲^{しゅうい}も
For All Life 志向^{しこう}を高^{たか}めやすくなって、周囲^{しゅうい}の For All Life 志向^{しこう}が
高^{たか}まれば、そのおかげで自分^{じぶん}自身^{じしん}も For All Life 志向^{しこう}を高^{たか}めやすく
なる—” そんなことも」

「そうね。やっぱり、『For』の連鎖^{れんさ}というか、『For』のリレーと
いうか—。 —」

258

「—アハッ♪ 最初^{さいしよ}は周囲^{しゅうい}の一部^{いちぶ}の人^{ひと}たちから恵^{めぐ}みを受け取^うって
いた赤^{あか}ちゃんが、成長^{せいちやう}することで周囲^{しゅうい}のみんなに恵^{めぐ}みを与^{あた}えられる

ようになることを思い出せば、

誰かから恵みやフルーツを受けて

→その誰かや自分自身を含むみんなに恵みやフルーツを与えて

誰かから恩や愛を受けて

→その誰かや自分自身を含むみんなに恩や愛を与えて

誰かのおかげで生きて

→その誰かや自分自身を含むみんなのために生きて

…

のような『For』の増幅や拡散もあるのかもね。単なる『For』の連鎖やリレー、お返し…だけでなく——」と溜音。

「——」・・・「——なるほど。きっとそうだよ！

だからこそ、人類がここまで繁栄できたわけだし——。

なぜなら、仮に、みんながみんな身内の中だけで、本当に“単なるお返し”や“単なる恩のリレー”だけをしていたなら、農業や工業、科学技術や医療…の広まりという形の『For』の増幅や拡散もなくて、人類は、ここまで繁栄できていなかったはずだから」と僕。

「——フッ♪ そうね。

例えば、今のどこかの小学校の先生は、かつて小学生だったときに、当時の担任の先生から恩や愛を受けて、今は、その恩や愛を何十倍、何百倍にも増やして多くの子どもたちに与えている—— このことにも『For』の増幅や拡散があてはまるわ。

もちろん、これと似ている『For』の増幅や拡散は、教師以外にも、医師、歌手や作家、農家や漁師、学者やスポーツ選手、会社員や公務員、自営業者や経営者…の方々にも、きっと、あてはまるはずよ」

「アハッ。そうだね。

そういう、いわば“恩増幅社会”や“恩拡散社会”こそが、きっと、
 “そうあるべき&そうありたい”本来の社会の姿なんだよ。“単なる
 恩返し社会”や“単なる恩リレー社会”ではなくて——」

「そうね♪」

259

「——それに、もし『For』の増幅が全くなければ、そもそも、成
 熟 For All Life が全く成り立たないようでもあるよ。

なぜって、単に“自分と相手の両方を喜ばせる”だけでも、その
 時点で、単なる恩返しや単なる恩リレーを超えた増幅が起きている
 ことになるのだから。今さっき初めて気づいたけれど——」と僕。

「アハッ♪ 私も♪」

そう言えば、お姉ちゃんも話していたよ。子どもが元気で、とき
 に笑顔がこぼれるだけで、十分うれしくて満足なんだって——。

それは、お母さんも同じっぼい——。いろいろ口うるさいときも
 あるけど、基本的には、娘である私たちが元気で幸せでいてくれる
 だけで十分という感じで——」心笑みながらの溜音。「親たちへの
 恩返しよりも、まず、自分自身や次の世代に喜びや愛情をプレゼン
 トしてあげてほしい。それだけでも十分恩返しになっているだけで
 なく、そもそも、こっちは恩を与えた時点で十分に喜びを得ている
 のだから、みたいな？

私も、将来、そう思えたらいいな——」

「それが、本来の“無償の愛”なのかもね。たとえ、外から無償に見えても、実際は、心の中で、ちゃっかり、ほぼ有償に匹敵するほどの報酬を受け取って——。

——“無償の愛”の正体、見破ったり！みたいな？」

「フフフッ。そうよね。

——私、自作の詩や歌、あなたに喜んででもらうだけで、十分満足だったわ。これも、似たようなものかもね？

“無償の愛”というほど大げさじゃないけれど——」

「そうそう、わかるわかる。僕も、写真、君に喜んででもらうだけで、十分うれしい気持ちになっていたよ。これも、きつと同じだね。

アハッ」僕は、部分的には似た者どうしでもあった？

「フフッ♪ そうね。

この気持ちは、本来、私たちや親だけでなく、教師や医師、歌手や作家、農家や漁師、学者やスポーツ選手、会社員や公務員、自営業者や経営者…の方々も、きつと同じはずよ。

——だから、本来、単なる恩返しや、単なる恩リレーにとどまる必要なんて、さらさらないのよ」

「恩増幅や恩拡散も、ありなんだね？」

「——ありどころじゃないわ。だって、恩や恵みやフルーツや愛は、何十倍にも何百倍にも増幅できて、自分自身を含む多くの人へ広く届けることができるんですもの♪」

「そうだね。そのおかげで成熟 For All Life の実現も、健やかな自己実現——自己フルーツ化や自分らしいフルーツの現出も限りなくできそうだし——。

それに、例^{たと}えばフルーツを提^{てい}供^{きょう}してくる植^{しょく}物^{ぶつ}も、フルーツを何^{なん}十倍^{じゅうばい}にも何^{なん}百倍^{ひゃくばい}にも増^{ぞう}幅^{ふく}させて広^{ひろ}めているくらいだから、『For』の増^{ぞう}幅^{ふく}や拡^{かく}散^{さん}は、決^{けつ}して、摩^ま訶^か不^ふ思^し議^ぎなことでもで深^{しん}遠^{えん}なことでも特^{とく}殊^{しゆ}なことでもなく、自^し然^{ぜん}で身^み近^{ちか}なことなんだね」

「ええ、そうね♪」

おん めぐ あい
恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルー^{フルー}ツや愛^{あい}は

なんじゅうばい なんひゃくばい ぞうふく
何^{なん}十^{じゅう}倍^{ばい}にも何^{なん}百^{ひゃく}倍^{ばい}にも増^{ぞう}幅^{ふく}でき^て

じぶん じしん ふく おお ひと
自^じ分^{ぶん}自^じ身^{しん}を^を含^{ふく}む多^{おお}く^くの^の人^{ひと}へ

ひろ とど
広^{ひろ}く届^{とど}ける^るこ^こが^がで^でき^きる

260

「この“いくらでも増幅させたり、拡散させたりできる恩や恵みやフルーツや愛”の中に、さまざまな知恵、技術、工夫…も含まれていることを思い出せば——人類がここまで豊かに発展できたのも、単なる恩返しや恩リレーで終わらなかったおかげであると、より納得できる」と僕。

「そうね。下手に単なる恩返しや単なる恩リレーで終わってしまうことは、単に個人にとってもつたいないだけじゃなく、社会全体や人類全体にとっても大きな損失なんだわ。大きな可能性やチャンスが失われてしまうことになるのだから——」と溜音。

「そうだね。単なる恩返しや単なる恩リレーで終わらないことは、きっと、多様な人間社会レベルのライフが、成熟 For All Life を実現して『Love - Love の関係』を構築することによって健やかな全人類レベルのライフを誕生させるためにも必要なことだよ。それは、多様な人間社会レベルのライフが、それぞれの恩や恵みやフルーツや愛を、お互いに増幅、拡散させ合ってこそ実現すると思う」

「——そうね」

「それに、単なる恩返しや単なる恩リレーで終わらないことは、きっと、人類を含む多様な種が成熟 For All Life を実現して『Love - Love の関係』を構築しながら生態系レベルのライフとして長く存続するためにも必要なことだよ。

それが実現できるのは、まさに、人類を含む多様な種がもたらす、恩や恵みやフルーツや愛の増幅や拡散があつてこそだと思う」

「——ウン。 ——。 ——え？」

261

海^{うみ}辺^べのキラキラがピーク^{たっ}に達^たしている——。

音楽イン ♪いつかここへ Someday Here

「この生態系^{せいたいけい}レベル^なのライフ^{そんぞく}が長く^{たと}存続^{せい}するためには、例えば、生態系^{せいたいけい}レベル^なのライフ^{そんぞく}からたっぷり^た“恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルーツ^あや愛^{あい}”^うを受けとりながら^{せいちよう}スクスク成長^{そんぞく}してこれまで^{じんらい}存続^{しゅ}してきた人類^{しゅ}という種^{しゅ}も、何らか^{なん}の“恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルーツ^あや愛^{あい}”^うを増幅^{ぞうふく}、拡散^{かくさん}させて生態系^{せいたいけい}レベル^なのライフ^{そんぞく}に与え^{あた}続ける^{つづ}べきだ^たってことさ。例えば、果樹^{かじゅ}という植物^{けい}が、何十倍^{しよくぶつ}、何百倍^{なんじゅうばい}と増幅^{なんびやくばい}させながら^{ぞうふく}フルーツ^あを提供^{ていきよう}し続けている^{つづ}ように——。

しかも、特に人類^{とく}という種^{じんらい}には、何千倍^{しゅ}、何万倍^{なんぜんばい}、何億倍^{なんまんばい}、何億倍^{なんおくばい}……という桁外^{けたはず}れの“恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルーツ^あや愛^{あい}”^うを提供^{ていきよう}できる可能性^{かのうせい}もあると思う^{おも}よ」と僕^{ぼく}。

「え？ どういうこと？」と溜音^{るね}。

「健^{すこ}やかな全人類^{ぜんじんらい}レベル^なのライフ^{たんじよう}を誕生^{うえ}させた上^{まえ}で、前^{はな}に話^{はな}した、生態系^{せいたいけい}レベル^なのライフ^{そんぞく}の『アタマ』^{ほうこう}の方向^{そんざい}の存在^{せいたいけい}——“生態系^{せいたいけい}レベル^なのライフ^{そんぞく}の頭脳^{ずのう}、脳神経系^{のうしんけいけい}”として積極^{せつきよく}的に活躍^{かつやく}することが、桁外^{けたはず}れの“恩^{おん}や恵^{めぐ}みやフルーツ^あや愛^{あい}”^うの提供^{ていきよう}に相当^{そうとう}しうるってことさ。例えば、隕石^た落下^{いんせきらつ}を予防^かするとか、急激^{きゅうげき}な気候^{きこう}変動^{へんどう}を予防^{よぼう}したり改善^{かいぜん}したりするとか、公害^{こうがい}や砂漠^{さばく}化^かを含む^{ふく}生態系^{せいたいけい}レベル^なのライフ^{そんぞく}のケガ^{びよう}や病^{ちりよう}気を治療^{ちりよう}するとかなんて、まさ^{おも}にそうだ^{おも}と思う^{おも}よ」

「あっ、なるほど——」

音楽イン ♪いつかここへ Someday Here262 に続く

262

「——ねえ。その生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在として提供できる桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”には、ほかに何があるかしら？

例えば、その中には、よりよい空気、よりよい水、よりよい土壌……つまり、よりよい環境が含まれるのは確かだろうけど」と溜音。

「その“よりよい環境”には、よりよい気温はもちろん、よりよい太陽光、よりよい風、よりよい雲…を含む、よりよいエネルギー循環はもちろん、それらをもたらししてくれる、よりよいアイデアとか、よりよい技術の開発とか、エネルギー循環についてのよりよい理解とかも、桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれると思うよ。

さらには、生態系レベルのライフのために働いてくれる、植物や動物などの営みを守ったり、積極的に支援したりすることも、桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれるはずさ。例えば、植林を進めたり、砂漠を緑地化したり…って、これらは結局“よりよい環境”であるだけでなく、“生態系レベルのライフの治療”でもあるんだけどね。アハツ」と僕。

「フッフ、そうね。そうすると、これらの“よりよい環境作り”や“生態系レベルのライフの治療”をより実現しやすくするような社会的なしくみ——よりよい“大学などの研究システム”はもちろん、よりよい“経済活動や行政、法律…”、それらを支えるような“一人ひとりのよりよい消費行動や投票行為”なども、間接的だけれど、きっと桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれるはずだわ。

「そうだね。

さらには、そういった生態系レベルのライフにも優しい人間社会レベルのライフを誕生させる一人ひとりの人間レベルのライフスタイルを支えるような、よりよい知恵も桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれているはずだよ」

「それは、よりよい知恵を広めたり、実践したり…を根底で支えてくださる方々の貢献も、桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”に含まれるってことよね♪」

音楽イン ♪いつかここへ Someday Here 263 に続く

263

「これらの多くは、人間社会レベルのライフの『アタマ』の方向の存在がもたらす桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”だね」と僕。

「そうね。人間社会レベルのライフの『アタマ』の方向の存在がもたらす、生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在としての桁外れの“恩や恵みやフルーツや愛”だから、まさに“重要部分中の重要部分”がもたらす“恩や恵みやフルーツや愛”だわ」と瑠音。

「——あ！人間社会レベルのライフの間で『Love - Love の関係』が構築されて健やかな全人類レベルのライフが誕生していれば、その健やかな全人類レベルのライフの『アタマ』の方向の人間社会レベルのライフの『アタマ』の方向の存在がもたらす、生態系レベルのライフの『アタマ』の方向の存在としての桁外れの“恩や恵みや

フルーツや愛”になる」

「えー！？

——^{すこ}健やかな^{ぜんじんるい}全人類^{たんじょう}レベルのライフが誕生していれば、ここにあり
る“^{おん めぐ}恩や^{あい}恵みやフルーツや愛”は、“^{じゅうよう ぶ ぶんちゅう}重要部分中の^{じゅうよう ぶ ぶんちゅう}重要部分中の^{じゅう}重
^{よう ぶ ぶん}要部分”^{おん めぐ}がもたらす“^{おん めぐ}恩や^{あい}恵みやフルーツや愛”だっていうこと？」

「そういうことになるね」

「すごい♪」

それは、すこぶるフルーツフルなデートだった。

音楽終了 ♪いつかここへ Someday Here

264

そして、^{だいがく ねん しょ か}大学3年の初夏——

音楽イン ♪夏 Summer

^{る ね ぼく}瑠音と僕は、ふたりして^{きせい おり}帰省した折に、それらの^{せい か}成果をおじいさ
んに^{つた}伝えるべく、^{いっしょ みさき}一緒に岬へと向かった。

ここらあたりに、“^{きまぐやく い み}究極の意味”の^{こた}答えがあるだろう。

そのように^{み こ}見込みながら——

けれど、^{みさき つ}岬に着いてみると、そこに、おじいさんの^{すがた}姿はなく、^{て がみ}手紙
が^お置いてあるだけだった。その^{て がみ}手紙には、おじいさんは^{いま げん き}今も元気で、
^{あい か}相変わらず^{こうかい}航海には^{ちゅう}まだ中であることが^か書いてあるだけだった。

^{ほんとう げん き}本当に元気ならいいんだけど・・・

音楽フェード・アウト ♪夏 Summer

265

帰省を終えて、いつもの大学生生活に戻った僕は、これまでの成果を、ある教授に話してみることに決めた。この教授の講義が一番好きだったし—— 彼は、最も尊敬する教授の一人だった。

「おお！ すばらしい！

——シンプル！ クリアー！ エレガント！

ミーニングフル！ ユースフル！ フルーツフル！

——さぞ、興奮したでしょう。いいなあ。私も、一生に一度は、このような成果を生み出してみたかったですなあ。

——ぜひ、一緒に喜ばせておくれ」と教授。

「——あ、ありがとうございます」と僕。

「もちろん、君の業績です。君の名前で、堂々と発表したまえよ。

全面的にバックアップしようぞ。ふあつふあつふあつ！」

「いえ、でも—— 新しいことが何もないような」

「いえ。君は、コッホ曲線という具体的なフラクタル幾何、および、フラクタルの概念を通じて—— “さまざまな分野”と“身近な人生”の間にある共通点を見いだしながら、自然 nature に対する見方をバージョンアップさせています。

つまり、誰もが漠然と思いついて、はつきりつかみきれなかった自然観を、誰もが目で見て直観的に理解できる形、共有できる形に表現しています。

これは、今まで、まだ誰もやったことのなかった画期的な業績ですぞ」

「——はあ。まあ——。でも——」・・・「間違えているかも」

「私を含め、誰もが、ときには間違えてしまう—— そのような存在です。なぜなら、誰もがみな、生身の人間ですから」

「——」

「間違いに気づきうるからこそ、本物なのですぞ。」

「すこぶる健全な営み——」

「——」

「それに何より、この学問、いえ、あらゆる学問の土台となりうる nature 自然についての新たな知を愛する営み——新たな Natural Philosophy、新たな自然知愛、および、新たな Principles of Natural Philosophy、新たな自然知愛原理は、単に間違えているにしては、あまりにも調和的すぎる」

「——知愛？」

「知識や知恵を含む知を愛すると書いて知愛——。これまで哲学と訳されることが多かった philosophy の新しい訳です」

「——僕は、哲学、知愛を学んでいませんし、知愛をしているつもりも、全然ありませんでした」

「ふあつふあつふあつ。知らず知らずに、ほとんど0からやっていたからこそ、まさに、本来の Philosophy、知愛なのですぞ」

「——」 . . .

266

「君の、この成果は—— “従来の学問や教室の、伝統やしがらみ…から距離を置く、自由な立場の君” だったからこそ、生まれたのか

もしれないですね。そのことは、決して引け目に感ずるべきことではなく、実は、素晴らしい魅力の1つなのですぞ。

——もっと、自信を持ちたまえ。ふあつふあつふあつ！」

「——。はあ——」・・・

「7つのワクワク枠、The 7 Frames For All Life——これは、人が生きるためになったり、学問を応援してくれたりするだけでなく、広く役立つでしょう。

つまり、何よりの魅力の1つは、この応用範囲の広さなのです。

これは、文化を越え、言語を越え、社会を越え、生物種を越え…応用できる普遍的な土台です。

あらゆる学問、あらゆる生態現象、あらゆる社会現象、あらゆる人間の営み、あらゆる生命現象、あらゆる化学現象、あらゆる物理現象…が、この共通の土台を利用して説明されうること——人類は、かけがえのない“普遍的なメタ・パラダイム”に相当するフレーム、すなわち、具体的なパラダイム作りやフレームワーク作りに役立つツールを手に入れたのです。むろん、それは、この地球上のライフみんなが手に入れたも同然——」

「——」・・・

267

「この“普遍的なメタ・パラダイム”に相当しているフレームは、みんなが進んでいる航路が間違っていないかどうかを教えてください、

まさにコンパスを^{ていまいちう}提供できるフレーム、Compassable Framesです。

また、^{たと}例えば、ある人間社会の^{にんげんしやかい}営みの^{いとが}是非についての^{ぜ ひ}判断を^{ほんだん}助けてくれたり、ある人間社会の^{にんげんしやかい}存在意義を^{そんざい}明確^{い ぎ めいかく}にしてくれたりするための^{つか}ツールとしても^{つか}使えるでしょう」

「——」

「君は、とても意味あることを成し遂げたのですぞ。胸を張りたまえ」

「——。あ、でも、^{ぼく}僕は、ただの^{がくせい}学生で、^{せんもん か}専門家でないですし——」

「ふあっふあっふあっ！ ^{せんもん か}専門家でなければ^{がくもん}学問してはならないと^{きみ}でも君は^{ほん き}本気で^{おも}思っているのですかな？

もちろん、^{せんもん か}専門家、^{こんご}スペシャリストも^{じゅうよう}今後とも^{そんざい}重要な存在であり^{つづ}続け、^{せんもん か}専門家にしかできない^{がくもん}学問があり^{つづ}続けます。

しかし、^{いつぽう}一方で、^{ひ せんもん か}非専門家、^{じゅうよう}ジェネラリストも^{そんざい}重要な存在であり^{つづ}続け、^{ひ せんもん か}非専門家にしかできない^{がくもん}学問もあり^{つづ}続けるのです」

「——。はあ——。でも、この7つのワクワク^{わくわく}梓^{たくし}自体は、もともと、おじいさんが^{おし}教えてくれたものでして——」

「おじいさん？」

「はい。^{じもと}地元に住んでいる“^す実の^{じつ}祖父^{そふ}が^{そうそふ}曾祖父”のような^{そんざい}存在の方^{かた}です。^{かれ}彼は、^{いま}今、^{こうかい}航海に出ているらしく—— ^{どこ}どこにいるのかも、^{わか}わかりません」

「——そのおじいさんの^{ねんれい}年齢は、わかりますか？」

「えっと、おそらく—— ^{いま}今は、^{すく}少なくとも、^{さい}80歳から^{さい}90歳くらい^いじゃないかと——」

「——。——うん。ぜひ^{はっぴよう}発表^{きみ}しなさい。君の^{ことば}言葉で—— ^{きみ}君の名^な前^{まえ}で——。きっと、そのおじい様も、とても^{よろこ}喜ばれることでしょう」

268

だいがく ねん しょしゅう
大学3年の初秋——

音楽イン ♪秋 Autumn

その発表が、数日後に迫っていた。

それは、僕にとって全く初めての経験で、漠然とした不安が僕を
包み込んでいた。

瑠音と僕は、キャンパス内の、木の葉がわずかに色づき始めてい
る並木道を歩いていた。

「どうしたの？」心配してくれる瑠音。

「え？」思わず聞き返す僕。

「だって—— 元気がないみたいから——」

「ああ——」

音楽 ♪秋 Autumn 269 に続く

269

瑠音と僕は、その並木道沿いにある、木陰のベンチに座った。

結局、その不安を彼女に打ち明けることにした。

「その発表—— 何となくコワイんだよ」と僕。

「え？ どうして？」と瑠音。

「——。 だって、大勢の見ず知らずの方々の前で発表するのは、
何となく不安で緊張するというか—— この成果が、かつて夢とし

おも えが ながくもん がくもん どだい
 て 想い描いていたような学問そのものではなく、学問の土台となる
 あら ち あい いと な あら ナチュラル フィロソフィー あら しぜん
 新たな知を愛する営み——新たな Natural Philosophy、新たな自然
 ち あい そうとう
 知愛とかに相当しているって 言われて戸惑っているというか——
 それに、何より、もし間違えていたらって思うと——」・・・

「自信ない？」

「自信は——」・・・ 「——ある。いや、ない。いや、ある。

いや、ない—— いや」

「フフッ。

——“間違えているにしては調和的すぎる” そんなふうに教授に
 言っていたいたんでしょ？」

「——あ、でも、“私も生身の人間だから間違える”って、応援して
 くださっていた教授自身が話していたんだぜ!？」

「——フフッ」

る ね は なが
 溜音は、それから、しばらく葉っぱを眺めた。

そして、ふいに口を開いた。

「間違えるって、そんなに悪いこと？」

「え？」

かり
 「仮に、もし、どこかの間違いに気づいて“イヤだな、悪いな”と思
 ぶぶん み す おも
 う部分を見つけたのなら、“いいな、好きだな”と思えるまで、
 ぶぶん かいぜん はなし
 その部分を改善すればいい—— それだけの話じゃないかなあ。

そうやって、バージョンアップを重ね続けなければならないのよ」

「——」

「もちろん、間違えない努力も、とても重要なことよ。

でも、それと同じくらい、いえ、それ以上に重要なことは——

「間違いに気づこうとする態度」と「気づいた間違いをどう活用するか」じゃないかしら？ その方が、結果的に、より真実に近づけるはずだし——」

「——」

「それに—— これは“生きる力”と一緒に、ほかならぬ第7フレームが教えてくれる、すてきな知恵の1つでしょ？」

「——うん。まあ——」

「責任を持って対応し続けられればいいのよ。

まさに愛し続けられればいいの——。これまで通り、これからも。

——きっと、成熟に向かっているライフにとっては、間違いは通過点にすぎないのよ。間違いをうまく活用できれば、それだけ、よりよく改善できるんですもの」

「——」

「それに——」

「それに？」

「——ううん。何でもない」 瑠音は視線を外しながら言った。

音楽フェード・アウト ♪秋 Autumn

270

心地よい、そよ風が、瑠音と僕を時折包み込んでいた。

——しばしの沈黙を破り、僕は口を開いた。

「確かに、君の言う通りだよ。もし、間違いをうまく活用できれば、

改善かいぜんにつながる——」・・・「ただ——」

「ただ？」と聞き返す瑠音。

「うん。ただ、結局けつぎよくは——僕自身ぼくじしんの心こころの中のハードルなかも含めて、いろいろなハードルはじを自分じぶんの力ちからでコツコツの乗りえなきや始まらないのかもね。

何だかんだ言っても、結局けつぎよくは、自分じぶんの力ちからで、一歩一歩いっぽいっぽ、坂さかを上り続け、それを乗り越えなければ、何にも始まらないのかも——」

「——」

彼女かのじよは何も言わないまま、しばらくの間、ぼんやりと遠くを眺め続けた。

271

「——フフッ」瑠音るねは、ふいに笑い出した。

「え？ どうしたの？」と思わず尋ねる僕。

「ねえ、覚えてる？」瑠音るねは明るく尋ね返した。

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

「え？ 何を？」

「高校生のとき、私が、毎朝、あの上り坂を、自転車じてんしゃを引きながら歩いていたこと——」

「ああ、覚えているよ」忘れるわけがなかった。

「どうして、いつも、ああしていたか、わかる？」

「——え？ やっぱり、体力たいりよくに自信じしんがなかったからとか、しんどかつ

たからとかじゃない？」

「そう。それも、^{たし}確かにあったわ。でも——^{じつ}実は、ほかに^{りゆう}理由があったの」

「——どんな^{りゆう}理由？」

「——うん。^{わし}私——^ああなたに会えたからなの。

^{ほんの}ほんの一瞬^{いっしゆん}だけけどね。アハッ。——^{まいあさ}毎朝、ああして、^{じてんしゃ}自転車^を引いていると、あなたとふたりきりで会える^あ確率^{かくりつ}がグーンと^{たか}高まることを^{はっけん}発見していたのよ」

「え？」^{いがい}意外^だだった。

「私——^{まいあさ}毎朝、あなたに、あいさつしてもらえるのが、^{うれ}すごく嬉しかった——」^{かのじよ}はにかみながらの^え彼女の^え笑みがコスモスのように^{いろ}色づいているのがわかった。

「——」

「だからといって、^{きょうしつ}教室とか、^{ろうか}廊下とかじゃ、ふたりきりになれるはずもなかったし——^{ころ}あの頃、そういうのって、なかなか^は恥ずかしかったじゃない？ だから——^{わし}あれは——^{わし}私が、それを^{たの}楽しみにしながらやっていたことなのよ。——アハッ♪^いそう言う意味^いでは、^{わし}私、^{さか}坂を^{のぼ}上げるのも^す好きだったのかもね？」

「——」

「——あれ？^{わし}私、^{はなし}なんで、こんな話、^{はじめ}始めたんだっけ？」^{はにか}はにかみながら、^{るね}溜音は、しばらく^{とまど}戸惑った。

音楽フェード・アウト ♪心地よき日々 Comfortable Days

「あ、そうそう、そうよ。だから、あなたが、^{いま}今、そのような^{かんじ}感じ^でで“しんどい^{さか}坂”を一歩一歩^{いっぽいっぽ}上っている間にも——^{あいだ}きっと、^{なん}何ら

かの喜びとか楽しみとかを見いだせるかもしれないよってことを
言いたかったのよ」

「——」

「——それに、誰が何と言ったって、私は、あなたの味方よ。ずっと——。

わたしが、——愛しているから。

これまでのあなたも、これからのあなたも——。

——だから、余裕よ。アハッ♪」 瑠音は明るく心笑んだ。

このとき、彼女の愛がフラッシュバックした。

音楽イン 後半のサビの部分から ♪秋 Autumn

こうしゃない みずぎすた はし るね
校舎内を水着姿のまま走る瑠音——。

その後も、いつもと変わらずあいさつする瑠音——。

じてんしゃ にだい お はし るね
自転車の荷台を押して走る瑠音——。

「きっと、本屋さんに行ってみるといいよ」とアドバイスする
瑠音——。

「——おーい！」と、赤ちゃんを抱っこしながら励ましにくる
瑠音——。

だいすきー!!」と、海に向かって叫ぶ瑠音——。

ふため と るね
再び目を閉じる瑠音——。

「もう、本当に、がんばり屋さんなんだから——」と言いながら
赤ちゃんコンパルンクルを引き受ける瑠音——。

「そんなあなたが—— 好き」と支持する瑠音——。

「すごいことよ。きっと大発見よ！」と褒める瑠音——。

...

そして――

「誰が何と言ったって、私は、あなたの味方よ。ずっと――」と励
ます瑠音――。

瑠音の笑顔が、声が、ことばが、優しさが、心が…

彼女のすべてが、表現できない美しさに満ちあふれているように
感じられた。

彼女がいとおしかった。

彼女の存在が奇蹟的に感じられた。

このとき初めて―― 瑠音が自分以上に大切な、この上ない宝で
あることを実感し、その存在に心から感謝した。

このとき、もうすでに―― “しんどい坂を上る過程での喜び”
を、十分すぎるほど、すでに見いませた気がした。

音楽終了 ♪秋 Autumn

272

いよいよ、生まれて初めての研究発表の当日――。

その日は、ちょうど、彼女にとっての大切な試験の日と重なって
しまっていたので、瑠音は発表会場に来られなかった。

瑠音と僕は、お互いの成功を祈り、お互いに“手作りのお守り”
を交換し合っていた。

それでも、演台の上立った僕は、えらく緊張していた。

おそらく教授が宣伝してくれたからか、会場は多くの人たちであふれ返っていた。

それでもシーンと静まり返っている会場——
注がれる多くの視線—— バクバクと高鳴る鼓動——

僕は、ポケットの中の—— 彼女のお守りを握り、それから、おじいさんの丸い石のお守り“アインシュタイン”を握った。

そのときだ。ある人影の、例のしぐさが目に入ったのは——

!!!

観客席の中の、そのしぐさの正体に僕は歓喜した。

なんと、おじいさんが、片方の手を左右に大きく振りながら、もう片方の手の親指を上に入れて前後に動かしながら、頭を少し横に傾けながら、こちらに向けて、心笑みかけているではないか！

音楽イン ♪ハーモニー Harmony

ああ、元気だったんだあ。そして、来てくれたんだあ。

——ありがとう。ありがとう。

涙が、にじみかけた。

“ゆっくり、ゆったり深呼吸”を繰り返した僕は—— 気持ちが落ちていた状態で口を開いた。

心笑みながら——。

「——この発表を、地元の偉大なおじいさんへ捧げます」

会場が少しざわめいた。

おじいさんは両腕いっぱい大きな円を空中に描き始めた。

「——もちろん、この会場^{かいじょう}にいらして下さった皆様^{みなさまがた}方へも」
うなずきながらジェスチャーを繰り返^くし続^{つづ}けるおじいさん。
——え？

「あ、それから—— それから—— できれば、これからも力^{ちから}を合^あ
わせながら、ずっと一緒^{いっしょ}にライフをエンジョイしたい愛^{いと}しい人^{ひと}へも
捧^{ささ}げます」

うなずきながらジェスチャーを繰り返^くし続^{つづ}けるおじいさん。

「それから、それから——

親友^{しんゆう}や——

愛犬^{あいけん}や——

育^{はぐ}み支^さえくれた家族^{かぞく}たち——

優^{やさ}しく励^{ほげ}ましてくれた親戚^{しんせき}たち——

お世話^{せわ}いただいた先生^{せんせい}方——

お多^おくの時間^{じかん}をともに過^すごしたクラス^{なにかま}の仲間^{なかま}たちへも——

ここにおられない、すべての方^{かた}々^{がた}たちへも——

さまざまな知恵^{ちえ}や勇気^{ゆうき}を与^{あた}えて下さった、本^{ほん}の著者^{ちよしゃ}の方^{かた}々^{がた}
も——

さまざまな感^{かん}動^{どう}や楽^{たの}しみ^{あた}を与^{あた}えて下さった、あらゆる作^{さく}品^{ひん}
誕^{たん}生^{じょう}を支^さえて下さった方^{かた}々^{がた}へも——

…

懸^{けん}命^{めい}に、今^{いま}を生^いきている方^{かた}々^{がた}たちへも——

ここまで僕^{ぼく}らを育^{はぐ}んで下さった、過^か去^こを生^いきた方^{かた}々^{がた}へも——

かぎ かのうせい みらい い かたがた
 限りない可能性があふれる、未来を生きる方々へも——

しゅっしんち せだい じだい ねんだい せいべつ がっこう しょくぎょう
 出身地も、世代も、時代も、年代も、性別も、学校も、職業も…

あらゆる肩書きの壁を乗り越えて——

すべてのライフへ——

けい い かんしゃ こ
 敬意と感謝を込めて——」

音楽 ♪ハーモニー Harmony 273 に続く

273

「この地球上の見事なまでに絶妙な生態系の中で、人類が、恩や恵
 みやフルーツや愛を受けとる一方—— そのような時代は、すでに
 お
 終わりました。

この、何十億年もの歴史を抱える地球——

その最高傑作である美しい生態系の中で、恩や恵みやフルーツや
 愛を受け取る一方ではなく、われわれ人類の方からも積極的に与え
 ていく—— そのような時代が、もうすでに始まっています。

もはや——

かじょう ぶりょくかん かじょう じ こちゅうしんせい じ こそうしつ
 過剰な“ストレスや無力感”、過剰な“自己中心性や自己喪失”、
 かじょう ひ かん らっかん か まわ ほうこうおんち じょうたい
 過剰な“悲観や楽観”…に振り回されるままに、“方向音痴”状態に
 おちい ばあひ
 陥っている場合ではありません。

たゆまぬ謙虚さを通じて、自然 nature との調和性を高めること
を探究し続ける営みの数々に――

たゆまぬ改善を通じて、各方面で芽生え、育ち続けている、すば
らしい発展の数々に――

たゆまぬ恩や恵みやフルーツや愛の増幅と拡散を通じて、健やか
な全人類レベルのライフが誕生する、その過程の数々に――

…

ゆるぎない支持こそが、与えられ続けなければよいなと思います。

この地球上の生態系レベルのライフのために――

さらなる恵みを与える

知識や知恵が

意志や意欲、やる気や欲求が

そして、その実際の営みや成果が

今後とも大いに育まれる――

その“フルーツ育て”と呼べるプロセスが促されるために、この
発表が少しでも貢献できれば、とてもうれしいです。

この広い宇宙の中で、もしかしたら、すでに存在しているかもし
れない、ほかの天体生態系レベルのライフのためにも――」

一瞬、コンパース一家の姿が心に浮かんだ。

「もしかしたら、将来、われわれが誕生させられるかもしれない、
新たな天体生態系レベルのライフのためにも――

ち きゅうせいいたいけい
この地球生態系レベルのライフのためにも——

いっしゆん まる お ち きゅう すがた こころ う
一瞬、丸みを帯びた地球の姿が心に浮かんだ。

ち きゅうじゆう たよう しゆ こたいしゃかい
地球上の多様な種、个体社会レベルのライフのためにも——」

いっしゆん すがた こころ う
一瞬、ランプベリーの姿が心に浮かんだ。

しやうらい たんじゆう すこ ぜんじんるい
「将来、ぜひ誕生してほしい、健やかな全人類レベルのライフのた
めにも——

たよう にんげんしゃかい
多様な人間社会レベルのライフのためにも——

…

たよう にんげん
多様な人間レベルのライフのためにも——

み し だれ
見知らぬ誰かのライフのためにも——

み ちか だれ
身近な誰かのライフのためにも——

しんゆう
親友のライフのためにも——」

いっしゆん ここえくん え こころ う
一瞬、心笑君の笑みが心に浮かんだ。

こいびと
「恋人のライフのためにも——」

いっしゆん るね え こころ う
一瞬、瑠音の笑みが心に浮かんだ。

かぞく
「家族のライフのためにも——」

いっしゆん かぞく え こころ う
一瞬、家族の笑みが心に浮かんだ。

じぶんじしん
「自分自身のライフのためにも——

…

みんなのライフのためにも——

さいぼうしゃかい
細胞社会レベルのライフのためにも——

さいぼう
細胞レベルのライフのためにも——

...

せいたいこうぶんし しゃかい
生体高分子社会レベルのライフのためにも——

せいたいこうぶんし
生体高分子レベルのライフのためにも——

...

けんこう
健康のためにも——

めさき しょうらい
目先の将来のライフのためにも——

なが しょうらい
長い将来のライフのためにも——

か こ にな かたがた
過去を担った方々のライフのためにも——

みらい にな こども
未来を担う子供たちのライフのためにも——

いま にな わし
今を担う私たちのライフのためにも——

そのような For 『In』 & For 『Out』 の境地——

すべてのレベルの、すべてライフを愛する境地——

For All Life の境地——

いつもここにいられば、

すべてのレベルの、すべてのライフに愛されながら、

いつも心から笑っていられ、

なんじゅうばい なんびゃくばい
何十倍、何百倍もうれしくなれるのです。

ち え じっせん
この知恵の実践のために、

このライフのパズルを解く究極のカギを活用するために、
この発表が少しでもお役に立てれば、
私自身も、何十倍、何百倍もうれしいのです」

おじいさんの笑みが見える——。

自身の笑みが感じられる——。

みんなの笑みが感じられる——。

やっぱり、ワクワク粋だぜ！

やっぱり、フレー！ フレー！ フレームだ！

そうだよね？ おじいちゃん。

音楽そのままエンドロールへと続く
♪ハーモニー Harmony

7つのワクワク粋 / The 7 Frames For All Life

みんなのコンパス③

第7フレーム

『  』

【完】